何が起こったのか
――J・D・サリンジャーにおける戦争の影――

杉浦銀策

その一

一九一〇年代および二〇年代に生まれ、なんらかのかたちで第二次世界大戦を体験し、戦後その体験を引きずりながら創作をつづけたアメリカの作家の数はけっして少なくない。いまここでざっと年齢順にそうした作家の主な顔ぶれを並べてみると、つぎのようになる。

まずアーウィン・ショー（Irwin Shaw 1913–84）。彼の『若き獅子たち』（*The Young Lions*, 1948）は、作品の冒頭で戦前のそれぞれ異なった三人の若者たちの市民生活を紹介し、その後彼らが戦争の波に巻き込まれながらどのような運命をたどってゆくか、あるいは彼らのそれぞれの運命が互いにどのような絡み合ってゆくのか、などを有機的な構成に仕立て上げながら描いてみせた傑作である。文章は平易で読みやすく、いったん読みはじめると、文字通り巻を措く能わずの面白さなのだが、ただ物語の構成が見事であればあるほど人為的なからくりが気になり、それに登場人物の性格描写にもなにほどかの通俗性が感じられるのは避けられない。

つぎにハーマン・ウォーク（Herman Wouk 1915– ）。彼の『ケーン号の反乱』（*The Caine Mutiny: A Novel of World War II*, 1951）は太平洋戦争中のアメリカ海軍の駆逐艦内における無能な艦長追放という、緊急時における組織と個人の関係のあり方を問う問題作だが、『若き獅子たち』と同様、ユダヤ系アメリカ兵士の扱い方に甘さが残る。ちなみにショーも、ウォークもユダヤ系作家である。

他方、ジェイムズ・ジョーンズ（James Jones 1922–77）の『ここより永遠に』（*From Here to Eternity*, 1951）は、太平洋戦争前夜のハワイを舞台にして、非情な軍隊組織に死を賭して反逆しつづける一匹狼の兵卒を主人公にした物語である。ジョーンズは非ユダヤ系の白人作家であり、彼は上述のショーやウォークのようなユダヤ系作家たちとは対照的に、ユダヤ系の兵士を演じる人物に対してはことのほか厳しく、ときには冷笑的な描き方も辞さない。またジョーンズは愚直なまでに戦場の物語化に生涯をかけた作家で、何年か前に映画化されて有名になった『シン・レッド・ライン』（*The Thin Red Line*, 1962）は、ガダルカナル島をめぐる日米両軍の激しい攻防を描いた戦争小説である。表題の英語“the thin red line”とは、〈少数の勇敢な兵士たち〉という意味である。

しかし第二次世界大戦を扱った戦争小説の傑作といえば、なんといってもノーマン・メイラー（Norman Mailer 1923– ）の『裸者と死者』（*The Naked and the Dead*, 1948）とジョゼフ・〈ラー（Joseph Heller, 1923–99）の『キャッチ＝22』（*Catch-22*, 1961）がその双璧をなす。双方ともユダヤ系作家である。ほかにトマス・ピンチョン（Thomas Pynchon, 1937– ）の超大作『重力の虹』（*Gravity's Rainbow*, 1973）があるが、ピンチョンは以上のような作家たちより年齢的にかなり若く、世代的な差はむろんのこと、その徹底したポスト・モダニズム性の故に、ここでは一応考慮に入れない方がよさそうである。

『裸者と死者』は、太平洋のアノポペイという架空の島の攻防をめぐってアメリカ軍と日本軍が激突する物語で、

自然主義とモダニズムの手法が奇妙に交錯するこの本格的な戦争小説は、質量ともに読者を圧倒せずにはおかない。そしてそこに描かれる軍隊組織と個々の兵士たちとの対立関係は、戦後の社会組織に対する個人の実存的反逆というメイラーの生涯にわたる文学的主題の出発点をなすものであった。他方、ヘラーの『キャッチ＝22』はヨーロッパ戦線の空軍、とくに爆撃隊における組織と個人の問題、というよりは組織によって圧殺されかかった個人の抵抗という難問に挑戦した傑作である。一九六一年の出版ということで、六〇年代アメリカのポストモダニズム文学の先駆けともいうべき性格を帯びた革新的な実験小説、いわゆるブラック・ユーモア文学の範疇に属するものだ。メイラーと同年生まれの作者でありながら、『裸者と死者』より十年以上も遅れて出版されただけあって、手法上の相違は歴然としている。こうして『キャッチ＝22』は、手法上の斬新さと戦争認識の厳しさの故に、来たるべきヴェトナム戦争の悪夢を先取りして描いているかのような印象を読者に与える。

最後にカート・ヴォネガット・ジュニア（Kurt Vonnegut, Jr. 1922－　）。ヴォネガットは第二次世界大戦中に陸軍歩兵として従軍し、ドイツ軍の捕虜となってドレスデンの屠殺場の地下での労働を強いられた。当時ドレスデンは英米の空軍の絨毯爆撃で廃墟となりつつあった。したがって捕虜となった英米軍兵士たちは市街の地下室や退避壕に送り込まれ、死体を外に引きずり出す作業を課されたのである。ヴォネガットはそうした捕虜体験を通して『屠殺場五号』（*Slaughterhouse-Five*, 1969）という反戦小説的名作を書くにいたる。

さて、われわれがこれから問題にするJ・D・サリンジャー（J. D. Salinger, 1919－　）は一九一九年の一月生まれ。彼もまた以上のような戦争作家たちと同世代の青年として直接第二次世界大戦に従軍し、その苛烈な体験を記憶の底に刻み込みながら創作に励むことになる。もちろんわれわれはそういう彼をいわゆる戦争作家と呼ぶことはできない。彼は軍隊組織と個人の間の緊張に満ちた対立関係とか、軍隊組織の中の人種差別の問題、あるいは戦争

が必然的に内包する不条理性や残虐性とかいったものを真っ正面から見据え、それらを作品の主要なテーマとして掲げることはしなかったからである。しかしそうはいっても、彼のヨーロッパ戦線での体験は彼の作品のあちこちに影を落とし、とりわけ絶品というしかない短篇「エズメに捧ぐ―愛と汚辱のうちに」（"For Esmé — with Love and Squalor," 1950）において限りなく悲しく、かつ美しい戦争物語が展開されることとなった。

本稿では、以下にサリンジャー文学におけるクライマックスともいうべきこの短篇にいたるまでの作者のさまざまな体験の軌跡をたどっていき、しかる後に最終的には「エズメに捧ぐ」そのものの意味について考えてみることにする。

まずサリンジャーが一九三六年にヴァレー・フォージ陸軍幼年学校（Valley Forge Military Academy）を卒業したということは、われわれが彼の文学を考えるうえでかなり重要な事実として浮かび上がってくると思う。一九九一年のイラク対多国籍軍の戦争、いわゆる湾岸戦争で多国籍軍の総司令官をつとめ、一躍猛将としての名を馳せたシュワルツコップ将軍（H. Norman Schwarzkopf, 1934―）はこの軍学校の卒業生であった。つまりこの将軍は少なくともその出身校においてサリンジャーの後輩に当たるということである。もしサリンジャーが、この軍学校卒業後シュワルツコップ将軍と同じようにウェスト・ポイント陸軍士官学校に進学して職業軍人をめざしたならば、かなり高い階級にまで昇進していたかもしれない。しかしサリンジャーにはそういう気持ちはまったくなかった。文学青年と職業軍人――これはもう水と油だ。そもそもヴァレー・ファージ軍学校は、彼が自ら希望して進学した学校ではなかったし、それにこの学校の卒業生がそのまま職業軍人の道を突き進んで行く割合は決して高いわけではなかった。

サリンジャーは、はじめマンハッタンの普通の公立学校に通っていたのだが、父の事業の成功とともに一家が高級住宅街に住むようになり、十三歳のとき私立の名門校マクバーニー校（McBurney School）に移った。ところが名門のハイスクールはどうにも彼の肌に合わなかったらしく、やがて成績不良が原因となって中途退学の憂き目に遭うことになる。こうして父は息子を鍛え上げようとして、ペンシルヴェニア州にあるヴァレー・フォージ軍学校を選んだというわけである。

しかしそうはいっても、この全寮制の軍学校で二年間学び、無事卒業したということは、彼の創作活動に少しはプラスになったようである。彼が早くも一九四一年に、軍事教練や閲兵式を素材にしたコミカルな短篇「そのうち覚えます」（"The Hang of It"）を書くことができたのも、そのおかげであり、長篇『ライ麦畑でつかまえて』（*The Catcher in the Rye*, 1951）における寮生活の描写も、ヴァーレー・フォージ校での体験に負うところ大であったといってよいであろう。

一九三七年の秋、十八歳のサリンジャーはヨーロッパに向けて旅立った。父の家業である高級肉製品の輸入とハム製造業の技術を身につけ、またドイツ語とフランス語の語学力を磨くためである。そして主としてオーストリアのウィーンとポーランドのビドゴシュチを中心に滞在した。このヨーロッパ滞在が正確に何ケ月に及んだのかは分からない。当時ドイツのナチ政権の暗雲がヨーロッパを覆い、ヒトラーがオーストリアを併合したのは一九三八年三月十二日。サリンジャーは二月にはウィーンを離れたものと思われる。

サリンジャーの優れた伝記を書いたイアン・ハミルトンは言う。

サリンジャーが一九三八年の最初の二ケ月の間ウィーンにいたことは確かなようである。したがってナチスの

暴徒が街をうろついて狼藉を働くのを目撃したということは非常にあり得ることだ。[1]

また今年［二〇〇〇年］の秋にサリンジャーの些かショッキングな伝記を出版した長女のマーガレット・A・サリンジャーも言う。

一九三八年三月十二日、オーストリアはヒトラーの手に落ちた。父はおそらく二月までにはウィーンを離れたのだろうが、しかし彼がその冬住んでいたユダヤ人街を襲ったナチスの暴徒どもに気がつかなかったはずがない。父は私にそこでの愛すべき家族のことだけしか語らず、［ナチスの］恐怖について話すことはなかった。[2]

他方、サリンジャーは第二次世界大戦の前のウィーン滞在の思い出と、後に連合軍兵士としてドイツに駐留した際の任務を素材として、一九四八年二月に「思い出の中の少女」（"A Girl I Knew"）を雑誌に発表した。最初サリンジャーがつけた題名は「ウィーン、ウィーン」"Wien, Wien"というものであったという。[3]

短篇「思い出の中の少女」における主人公は同時に語り手でもあり、ジョン（John）という名の十八歳の少年。大学一年のとき学年末試験に失敗し、一九三六年の七月、ヨーロッパに向けて出港した。そしてドイツ語の勉強のためにウィーンに五ケ月余り滞在。おそらくユダヤ人地区と思われる街の郊外にアパート住まいをする。

アパートの階下には、抜けるような美しさの少女が住んでいた。レア（Leah）という名の、十六歳になるユダヤ人少女であった。ジョンは彼女に淡い恋心を抱く。レアは父親の期待を一身にあつめる娘で、あるポーランド人の青年と婚約中であった。したがってジョンの恋心が実を結ぶ望みはなかった。しかし四ケ月ほどのあいだ、〈ぼく〉

は片言のドイツ語で（じっさい彼が話したり、書いたりするドイツ語は文法上の誤りに満ちていた）[4]、他方彼女の方も片言の英語で、というぐあいにして会話を重ね、週に二、三回ずつ会う機会をもつことができた。しかしやがて〈ぼく〉は、予定通りフランス語の勉強のためにパリに渡らねばならず、一九三六年の十二月初旬、彼女に別れを告げることとなった。

パリ遊学を終えた〈ぼく〉は、一九三七年の暮れにアメリカの大学に戻った。するとレアから、彼がウィーンに残してきたレコードの小包と一九三七年十月十四日付けの手紙が舞い込んできた。手紙の中で、彼女は、その後結婚して同じウィーンに住みつづけ、無事に暮らしていることを伝える。

やがて時が移り、大戦の勃発となる。〈ぼく〉は軍人として海を渡り、戦場を駆け回りながら、歩兵師団付き防諜部員としてドイツの一般市民やドイツ軍兵士の捕虜の尋問を行うようになった。〈ぼく〉は自らの職務を利用してレアについての情報を得ようとしたが、収穫はなかった。そしてさらに終戦後、〈ぼく〉は軍事上の書類を届けるためにウィーンを訪れる機会に恵まれ、今はアメリカ軍将校の宿舎となっている、かつてのアパートを再訪することができた。ところがいろいろと情報収集に努めるうちに、どうやらレアはブーヘンヴァルトのナチス強制収容所で命が果てたらしいと判断せざるを得なかった。

以上が短篇「思い出の中の少女」の粗筋である。これが半ば自伝的な物語であることは確かであるが、細部においてどこまで作者の伝記的事実に忠実だったのか、となると必ずしも判然としない。戦争直後サリンジャーがキューバ在住のヘミングウェイ宛てに書いた手紙によれば、ウィーン滞在中にある少女とスケートに出かけた午後のことが忘れられないと語っているという。[5]「思い出の中の少女」の物語はある程度まで事実に即したものだったのに違いない。

だがここでわれわれは、ふと、はてな、と思うことがある。それは伝記とフィクションの間に見られる年代上の齟齬のことである。すでに述べておいたように、サリンジャーがヨーロッパに旅立ったのは、一九三七年の秋であった。ところが物語の主人公ジョンが渡欧したのは一九三六年の七月ということになっている。双方の間には一年以上の開きがある。またサリンジャー自身は一九三八年二月にはウィーンを離れていたはずなのに、物語の主人公の方は一九三六年の十二月にウィーンからパリに向かったことになっている。なぜ作者のサリンジャーは、このような時間的ずれを設けて創作したのだろうか。

サリンジャーが物語における主人公のウィーン滞在を一九三八年の冬ではなく、一九三六年の後半の五ヶ月余りのこととしたのは、主人公のウィーン滞在の時期と暴力的なナチズムのオーストリア併合の接近という危機的な政治状況の時期を重ね合わせることに躊躇をおぼえたからであるに違いない。つまり当時のヨーロッパにおける暗い政治状況およびその不吉な雰囲気について自らの体験的叙述として誇らしげに、またはヒステリックに書き立てることを避けたかったのかもしれない。あるいはまた、複雑な国際政治に絡まるイデオロギー的な諸問題を物語の中に組み込むだけの勇気に欠けていたということなのだろうか。同じユダヤ系作家ではあっても、サリンジャーはそのノンポリティカルな創作姿勢において、メイラーとは対極点に立つ小説家であった。彼は、政治的イデオロギーの世界は努めてこれを避け、ひたすら個人的な心情の世界に閉じこもろうとする。後年メイラーがそのようなサリンジャーの怯懦ともいえる姿勢に不快感を示すことになるというのも、一面からいえば、無理からぬところかもしれない。

だが作家にはそれぞれの気質（テンペラメント）というものがある。それにサリンジャーのウィーン滞在の時期に合わせて物語の舞台設定をすると、荒れ狂うナチズムの嵐の中で、レアはジョンに小包を送るどころではなくなる、という物語づ

くりの技術上の問題もあったのかもしれない。しかしやはりサリンジャーが体質的に陰惨な暴力的状況を描くことを好まなかったということの方がより大きな要因になっているのだろう。

ところで、「思い出の中の少女」の主人公は、戦時中アメリカ陸軍の歩兵師団付き情報部員としてヨーロッパでドイツ人捕虜を尋問したことがあった。するとその捕虜の中にウィーン出身の下士官がいて、この下士官は気を付けの姿勢で、これまでどんなに残酷な仕打ちがユダヤ人たちになされたかについて語ったという。このとき語り手でもある主人公は、このドイツ人に関して、他人の苦しみにについてこんなに顔をゆがめて語る高貴な人間を見たことがないと述懐する。だがまもなく、この捕虜はじつは脇の下のすぐ近くの入れ墨からナチスの親衛隊の一員であったことが判明する。そこで主人公は愕然としてレアの情報集めに関する質問を止めてしまったという。

ヨーロッパ滞在中の若きサリンジャーは、しばしの間ポーランドのビドゴシュチで豚の屠殺場やハム工場で見習いの仕事についていた。父の命令のためとはいえ、気の進まぬ仕事であった。ハミルトンはまた、当時ビドゴシュチにはサリンジャーの遠戚の家族が住んでいたのではないかと推測する。[6]

もしこの推測が正しいとすれば、この家族もナチス・ドイツ軍の犠牲になった可能性もなしとしないであろう。

一方、ユダヤ人のラビを祖父とするサリンジャーは、少なくとも心理的には意外なほどにユダヤ人問題に関するプレシャーを抱えていたらしく、長女のマーガレットはとくにこうした側面を強調してみせている。だがそれにもかかわらず、サリンジャーは「思い出の中の少女」の中でナチズムをあからさまに糾弾することはしない。それは彼における一種の芸術的ストイシズムと呼べないこともないのだが、それにしても彼の創作姿勢は、たとえばハーマン・ウォークの『ケイン号の反乱』に延々と描かれる軍法会議の席上で弁護人のグリーンウォルト中尉が、「ドイツ人は海の彼方で、われわれユダヤ人を煮詰めて石鹸に変えている。・・・・ポーランドのクラコフには伯父と伯母

がいたんだが、二人ともいまでは石鹸と化している[7]」と叫ぶのとは著しく対照的である。じっさい本来ならば、「思い出の中の少女」の〈ぼく〉は、尋問中のドイツ人捕虜がナチスの武装親衛隊のメンバーであることが判明したとき、一人のユダヤ系アメリカ兵士としてこの男に報復の一撃を加えてやりたいという衝動に駆られたといった心情を漏らしたとしても、不自然なことではなかったはずである。だがサリンジャーはそうした描き方をしなかった。

おそらく「思い出の中の少女」の主人公、ないしは作者のサリンジャーは、ヒトラー総統の親衛隊に潜む悪魔性と、個々の隊員の示す血の通った人間性の落差の中に、人間存在の不可思議さを感じ取っていたのではあるまいか。いや、のちに少しばかり触れる機会があるであろうように、彼はすでにパリ入城の際に、人間の中に潜む恐るべき二面性を目撃させられていた、ということにわれわれは注目しなければならない。

その二

第二次世界大戦は、一九三九年九月一日の払暁、ナチス・ドイツ国防軍が電撃戦によってポーランドに侵攻し、同月三日イギリスとフランスがドイツに対して宣戦布告を行うとともに始まった。一九四一年の初め、二十二歳になったサリンジャーは、多くの若者たちと同様に志願兵として入隊することを決意したが、心臓に軽い疾患が疑われるという理由ではねられる。しかし同じ四一年の十二月に日本帝国海軍によるハワイの真珠湾攻撃がなされ、翌年の四月には合衆国陸軍の選抜徴兵制の選抜基準が若干緩和されたために、サリンジャーの徴兵が決まった。彼は防諜部隊の特別情報員としての訓練を受け、一九四四年一月海外赴任命令を受けた。

イギリスのデヴォン州ティヴァトンに送られたサリンジャー二等軍曹は、合衆国陸軍第四歩兵師団司令部に配属

された。そしておよそ八百名の特別情報員とともに数ケ月間にわたってヨーロッパ作戦地域（E. T. O.）における諜報活動のための特別訓練を受けた。またこの時期にアメリカ軍がデヴォン州の海岸で模擬上陸作戦を行い、七百四十九名が事故死するという事件が起こったということが、ハミルトンの伝記で報告されている。四四年四月二十八日および二十九日に起きた事件で、サリンジャーの「エズメに捧ぐ」の中ではX軍曹とエズメがその翌日に出会うことになっている。サリンジャー自身もよく町のメソディスト派教会を訪れ、聖歌隊の賛美歌を聞くのを楽しみにしていたという。[8]

「エズメに捧ぐ」の中で示唆されていることをそのまま信じるとすれば、サリンジャーの防諜部隊は五月の初めにはロンドンに移動させられたはずである。そしてちょうどその頃、ヘミングウェイも戦線特派員としてロンドンに到着し、さらにはのちの『若き獅子たち』の作者となるアーウィン・ショーも記録映画撮影班の一員としてやってきていた。すべては、来たるべき連合軍のノルマンディー侵攻作戦に備えてのことだあった。

六月五日の夜、千機を超えるイギリス空軍の爆撃機がフランス領土に備え付けられたドイツ軍砲台を襲撃し、また三千隻以上のイギリス、アメリカ、ポーランド、オランダ、ノルウェー、フランス、ギリシャ等の艦船がイギリス海峡を横断していた。翌日、つまり六月六日のD・デーの早朝までに一万八千名の英米落下傘部隊がフランス北西部のノルマンディーに降下し、橋を押さえ、ドイツ軍の連絡線を遮断した。午前六時四十四分、まずアメリカ軍が水陸両用戦車で北フランスの海岸「ユタ・ビーチ」に一番乗りの上陸を果たした。それにつづいて七時二十五分にはイギリス軍の第一陣が「ゴールド」と「スウォード」の両海岸に上陸し、またカナダ軍が「ジュノ・ビーチ」に上陸した。かくして真夜中までには十五万五千の連合軍部隊が上陸を果たしていた。ドイツ軍がアメリカ軍の攻撃に頑強に抵抗していた「オマハ・ビーチ」を除けば、連合軍の大半は内陸部に深く前進し、一ケ月のうちに約百

万の兵力を上陸させることに成功した。

ナチス・ドイツ軍側の誤算はまず、連合軍が渡海強襲作戦を実施するためには、好天気が四日間つづく必要があると考えていたこと。つぎに、連合軍のノルマンディー侵攻作戦は他の地点、たとえばベルギーなどへの本格的な攻撃のための陽動作戦であると勘違いしていたこと。そうしたこともあって、D・デー当日おける連合軍兵士の死傷者の数は比較的に少なかったといわれる。しかし史上最大の規模による空前の激戦であったことには変わりがない。それがいかに凄まじいものであったかは、今日映画「プライヴェイト・ライアン」によっても視覚的に想像することができる。

サリンジャーが防諜部特別情報員として配属された第四歩兵師団第十二歩兵連隊は敵軍の激しい抵抗をはねのけながら内陸部へと進軍。それから四十五度の右回転をし、イギリス海峡中部に突出するコタンタン半島の軍港都市シェルブールの攻略に向かった。これは、「エズメに捧ぐ―愛と汚辱とともに」の中で、エズメが「コタンタン半島に最初の先制攻撃をかけた部隊にあなたが入っていませんようにと願っています」[9]とX軍曹に手紙で書き送った戦闘のことで、まさしくサリンジャー＝X軍曹の図式が成立する。

六月二十五日、部隊はシェルブール郊外に迫り、シェルブールにおけるドイツ軍最後の拠点が陥落したのは六月二十九日のことであった。このときにはすでに七十五万名以上の英米軍がノルマンディー上陸を果たし、ドイツ兵は四万名が捕虜となったという[10]。その間サリンジャーは防諜部特別情報員として町や村の通信網の破壊、郵便局の占拠、フランス人の住民やドイツ人兵士の捕虜などを尋問してゲシュタポの要員やスパイの摘発に忙殺されていた。またこの数週間、彼は夥しい数にのぼる死傷者や町や村の破壊状況を目撃し、自らの死も覚悟せねばならない状況に置かれ、これはまことに筆舌に尽くしがたいと、故国へ書き送った[11]。

ガードン・F・ジョンソン大佐著『第二次世界大戦における第十二歩兵連隊の歴史』[12]から情報を得ながら父の伝記を書いているらしい長女マーガレットによれば、ノルマンディー侵攻作戦当時の第十二歩兵連隊は百五十五名の士官と二千九百二十五名の下士官兵から構成されていたが、上陸日の六月六日から六月三十日までの間における士官の死傷者は百一名、下士官の死傷者は千八百三十二名に達したという。もしこれが事実であるとするならば、戦死者そのものの数ははっきりしないけれども、とにかく驚くべき犠牲者の数であったいわねばならない。[13]

シェルブール工廠およびその他のドイツ軍の拠点が攻略された後、第十二歩兵連隊はサントネー近くの戦い、サン＝ローの戦い、モルタンの戦いなどでさらなる犠牲者を出しながら、ようやくパリ入城と相成った。八月二十五日のことで、この連隊はパリ入城の一番乗りを果たしたらしい。パリ市民はアメリカ軍を熱狂的に迎え入れ、パリ解放という歴史的なニュースが全世界を駆け巡った。

のちにサリンジャーが長女マーガレットに語ったところによると、彼とジープの同乗者たる僚友が逮捕したフランス人の戦争協力（容疑）者は、群衆によって彼ら二人の手から奪い取られ、その場で撲殺されたという。彼は群衆のすべてを射殺するなどできるはずもなく、容疑者を見殺しにするほかなかったのである。[14] 思うに、戦後このように少女時代の娘に語るサリンジャーの心境は複雑だったに違いない。自分が逮捕した容疑者がパリの一般市民によって殺害され、それをどうすることもできない、その辛さ。いや、平生は心優しい善人のはずのパリ市民が突如として殺人者に変貌する。まことに「思い出の少女」に描かれるように、他者（ユダヤ人）の受けた苦しみに顔をゆがめて同情する人間が元ナチスの親衛隊員だったことが判明したとしても、なんの不思議があろう。人間は、状況によってはいかなる存在にも変貌し得るのだ。サリンジャーは戦争体験を通じて、このような苦渋に満ちた認識に到達したのかもしれない。だがそれにもかかわらず、彼はこのような暴力的な情景を自らの作品の中に取り入れ

ることを嫌う。

パリ入城を果たしたサリンジャーは、ここでヘミングウェイに自作の短篇「最後の休暇の最後の日」（“The Last Day of the Last Furlough,” 1944）が掲載されている『サタデー・イヴニング・ポスト』誌を手渡す機会に恵まれた。ヘミングウェイはノルマンディー侵攻作戦終了後、従軍記者として第四歩兵師団とともにパリに向かったが、八月の半ば過ぎあたりから師団を離れ、独自の行動でパリ入りを果たした。そして有名作家としてリッツ・ホテルでパリ解放の祝賀パーティを催して、多くの訪問客を招いた。サリンジャーもその訪問客の一人となった。その後、あるときヘミングウェイがサリンジャーの部隊を訪れた際、自分の携帯しているドイツ製のルーガ拳銃とアメリカ陸軍の四五口径の拳銃のどちらの性能が優れているかについて議論が起こり、ルーガ拳銃の方が優れていることを証明するために、鶏の頭を拳銃の弾で吹き飛ばしてみせ[15]、これに激しいショックと嫌悪感をおぼえたサリンジャーは似たような醜い情景を「エズメに捧ぐ」の中に取り入れたともいわれる[16]。

私は以前、この噂は少々出来すぎているようにも思い、つぎのように推測していた。カーロス・ベイカーのヘミングウェイ伝記によれば、ヘミングウェイが鶏の頭を狙い撃ちして村のドイツ人の女にご馳走を作らせたというのは、第四歩兵師団が新たな戦闘任務に就くためにベルギーに入った後、ドイツとベルギーの国境近くの村においてであり、九月十二日の午後の出来事であった[17]。ヘミングウェイは主として第二十二歩兵連隊と行動を共にしていたようであるから、サリンジャーが鶏の頭撃ちの現場を目撃したのではあるまい。ともあれ、フランスのヴァローニュの戦場でジープのボンネットに跳び乗った猫をクレー伍長が狙い撃ちしたということは、たしかに「エズメに捧ぐ」におけるX軍曹とクレー伍長の会話の中に登場する[18]。

このように考えていた私であったが、この推測は間違っているのかもしれない。アレグザンダー氏によれば、ヘ

ミングウェイとサリンジャーがパリのリッツ・ホテルで会見した後の出来事として、あるときヘミングウェイはサリンジャーの部隊を訪れた際、ある誰か、多分サリンジャーと拳銃のことで議論になり、ヘミングウェイは自分のルーガー自動拳銃を取り出して、たまたま近くにいた鶏の頭を吹き飛ばしたのだという。[19]

十分な休養を取る間もなくパリからドイツ領に向けて進軍した第四歩兵師団は、戦争史上とみに有名な、熾烈を極めたヒュルトゲンの森の攻防戦で死闘を演じることになる。ベイカーのヘミングウェイ伝記における説明によれば、第四歩兵師団のヒュルトゲンの森攻略の目的は、ライン地方の都市デューレンの西に広がる、約五十マイル四方の鬱蒼たる森林地帯に連合軍進軍のための広い道筋を確保することにあったという。「この攻略の任務はほとんど不可能に見えた」とベイカーは言う。[20] 激戦は一ケ月つづいた。またマーガレット・A・サリンジャーの伝記によれば、二千二百二十二名の補充を得て三千三百六十二名の兵力となっていた第十二歩兵連隊ではあったが、このとき戦闘による死傷者千四百九十三名、タコツボ内における凍傷その他の非戦闘による死傷者千二十四名。[21] 一説によると、このヒュルトゲンの森の戦いは、本来ならばこれを避けることのできた戦いで、ブラッドレー将軍以下の指揮官たちの作戦ミスのために味方が不必要な損害を蒙ったのだともいわれる。[22]

サリンジャーの短篇「見知らぬ人」（"The Stranger," 1945）には「シエルブールも、サン＝ローも、ヒュルトゲンの森も、ルクセンブルグも、そういう地名など聞いたことのなかった時代」[23] 云々という言葉が見られるが、これらはすべて第四歩兵師団が、つまりサリンジャー自身が戦い抜いてきた激戦地のことである。そもそも第二次世界大戦におけるヨーロッパの西部戦線を素材にした小説は多数書かれてきたはずであるが、今日それらはほとんど泡沫のように消え失せ、文学史に残るものは寥々たるものといわねばならない。ということは、西部戦線の主要な激戦地を若い一兵士として戦い抜いた若者の中で、その後作家として名をなした者は皆無に近いということである。

その意味でもサリンジャーは極めて貴重な作家あるといってよい。それ故、冗漫のそしりを覚悟の上でいま少し彼の戦争体験を見てみることにする。

連合軍は一九四四年十二月十六日、ようやくヒュルトゲンの森の攻略に成功したが、その後、息つくまもなく、ルクセンブルグ防衛戦が始まった。ルクセンブルグの攻防戦とは、厳寒の十二月中旬、ドイツ軍が二十五万の兵力をもって連合国軍の八万の兵力に大反撃を展開してきたアルデンヌ攻勢（Ardennes Offensive）のことである。あるいは「バルジの戦い」（the Battle of the Bulge）とも呼ばれる。ドイツ軍はこれを「秋の霧」（Herbst Nebel）作戦と名付けた。

ドイツ軍は十日間にわたり進撃をつづけた。シュネーアイフェルの戦闘では兵力、火力ともに劣る約九千のアメリカ軍が包囲されて降伏したが、これは一度の大量投降という点では、アメリカの戦争史上フィリピンのバターン半島の激戦に次いで最大のものであった。一万九千名以上のアメリカ兵が倒れ、ドイツ軍も四万名を失った。[24] このようにアメリカ陸軍の第一方面軍は正面からドイツ軍の猛攻を受け、多くの犠牲者を出したわけであるが、このために連合軍が全戦域で敗北を喫するのではないか、と思われるほどの暗い戦況になった。連合軍は戦闘経験のない後方部隊を前線に投入することを余儀なくされた。しかしやがて十二月二十三日、アメリカ軍がアルデンヌ〈突出部〉(bulge)の南翼から反撃を開始することとなった。また年が明けて、一月三日モンゴメリー将軍麾下のイギリス軍がバルジの北翼に集結し、一月三日反撃を開始した。こうして一月六日、ようやく戦線は元の状態に戻ったというわけである。

ここでそのような苦戦を強いられたアメリカ軍の状況を、サリンジャーとの関わりで一言述べておくならば、彼の所属する第十二歩兵連隊はルクセンブルク東部の町エヒテルナハの防衛に当たっていたが、この町も十二月二十

一日にドイツ軍の手に落ちることとなった。そして故国の知人や友人たちの間ではサリンジャーが戦死したか、あるいは捕虜になったという噂が流れた。[25]

その後サリンジャーの部隊はドイツ領の奥深く進入し、ドイツ軍の抵抗が比較的少なかったものの、彼の防諜部特別情報員としての活動はつづき、ある解放されたばかりのナチスの強制収容所では、真っ先にそこへ飛び込んだ兵士の一人であった、というのが長女マーガレットの証言である。また「人肉の焼け焦げる臭いは一生かかっても鼻から消えるものではない」というのが父の言葉であった。[26] 彼女は父が語った収容所の具体的な名前は忘れたというが、ここで読者は、「思い出の中の少女」のレアがワイマールの近くにある村ブーヘンヴァルトの収容所で命を失ったらしいということを想い起こす。

第十二歩兵連隊の最後の戦闘はバイエルン州南部のテーゲルンゼーにおけるもので、一九四五年の五月二日、A中隊とナチ党親衛隊の間の交戦であった。周知のようにドイツの全面降伏は五月五日のことであったが、この知らせが部隊に届いたのはそれから三日後。第十二歩兵連隊はノイハウス[27]の町にあったゲーリングの城に指揮所を置き、占領任務を続行した。そしてこのあたりの地方行政は大変な混乱に陥り、サリンジャー軍曹を含む防諜部員たちの疲労は極限に達していた。五月十四日第四歩兵師団はニュールンベルクの西に移動し、アンスバハ市の周辺の治安にあたった。それからほどなくしてわがサリンジャーはいわゆる戦闘疲労、つまりは戦争神経症の犠牲となってニュールンベルク郊外の陸軍総合病院に収容される。アレグザンダーの伝記では、七月初旬のことだとされる。[28]

イギリス軍がドイツ軍と戦い続けること五年以上、ソ連軍は三年を超え、そしてアメリカ軍は三年になろうとしていた。打ち続く戦いに基づく過度の緊張がどの軍司令官の眼にも明らかであった。〔一九四四年〕十月四日ア

イゼンハワー将軍は合衆国軍医総監名で、その危険をはっきり述べた公報を在欧の全部隊に配布した。（中略）「精神病の問題を理解する鍵は、死や障害への恐れが過大な緊張を強いるため、兵士に失調を起こさせるという単純な事実なのである。よろめきながら救護所に入って来て、すすり泣き、身を震わせ、おののきながら、戦友に弾があたったとか、手足を失ったり死んだりしたと訴える精神を病んだ者の萎縮した無気力な顔を一目見れば、ほとんどの観察者はその事実が充分分かろうというものである。・・・戦闘の一瞬一瞬が非常に高い緊張を課するために、兵士たちは直面する緊張の強度と期間に直接関連して精神を損ねるのである」[29]

サリンジャーが戦争神経症に見舞われたのは、この公報が配布されてから八ケ月余りも戦闘をつづけた後のことである。したがって彼の精神の病いは決して不自然なものではなかった。だが「エズメに捧ぐ」に登場するX軍曹の戦友のクレー伍長は、そうは思わない。伍長は心理学を専攻している恋人の手紙の内容を紹介する。

「あいつがなんと言ったか知ってるだろう？　戦争なんかからだけじゃ誰も神経衰弱にならねえって言うんだ。たぶんおめえは、生まれつきずっと不安定なとこがあったんだろうって、そう言うんだよ」[30]

戦争神経症（war neurosis）ということに関していえば、第一次世界大戦が「砲弾ショック」（shell shock）、第二次世界大戦が「戦闘疲労」（battle fatigue）、ヴェトナム戦争が「ヴェトナム戦争症候群」（Vietnam syndrome）ないしは「心的外傷後ストレス障害」（PTSD）などといった精神医学用語を生み出したことは周知のことであるが、サリンジャー軍曹にあっては長期にわたる戦闘参加のうえに戦場で暇を見ては短篇の創作に精を出し、さらに

防諜部の特別情報員としての任務も誠実にこなそうとするのであるから、神経衰弱は必然の成り行きであったとも考えられる。すでに一九四五年の三月に帰国の途についていたヘミングウェイは、この頃キューバの自宅で生活していた。サリンジャーは病院からキューバのヘミングウェイ宛てに手紙を書き、入院生活の近況について語っている。われわれはこの手紙を直接読むことができないのだが、それは、ハミルトンの表現を借りれば、「ほとんど躁病に罹ったように陽気な」(almost manically cheerful) 調子で書かれているという。[31]

ところでこの手紙は一九四五年の七月に書かれたものであるが、ベイカーのヘミングウェイ伝記によれば、一九四六年七月二十七日付けの手紙だということになっている (J. D. Salinger to EH, July 27, 1946)。これは消印の日付けなのだろうか、それともサリンジャー自身が手紙に書き込んだ日付けなのだろうか。ベイカーのごとき謹厳な学者が四五年を四六年と読み違えることはないと思うのだが、もしかしたらサリンジャー自身が一年違いの年月日を書き込んだのかもしれない。これは現在のわたしの根拠のない推測なのだが、もしそうとすれば、サリンシジャーはこの時点でかなりの心的混乱状態にあったともいえよう。とにかくこの中でサリンジャーは、自分はキャサリン・バークレーのような看護婦を見つけようと思って一時的に入院していると冗談まじりに説明し、さらにホールデン・コールフィールドという少年とその妹フィービに関する戯曲の一部を書いたこと、ヨーロッパにおけるヘミングウェイとの歓談が戦時中における唯一の希望に満ちた一時(いっとき)であったこと、自らを全米のヘミングウェイ・ファンクラブの会長に指名したこと等々について語っているという。[32]

またアレグザンダーの伝記がこの手紙について解説するところによると、サリンジャーは病院の医療スタッフによって彼の性生活、幼年時代のこと、軍隊に関する感情等々について質問され、これに対して彼は、自分の性生活は正常であり、幼年時代は平穏無事、軍隊については好感情を抱いているなどと答えたという。そして最後に、精

神障害的な理由で除隊になることはいやだとも書いているという。[33] これについての長女マーガレットの感想はつぎのようなものである。

この手紙においてはっきりしていることは、彼（サリンジャー）がある一つのことを真剣に考えていたということである。つまり彼は名誉ある除隊ではなく、精神障害を理由とした除隊を突き付けるいかなる試みに対しても断固として戦う決意を固めていたということだ。彼はそれに成功し、軍医たちは数週間後彼を軍務に戻してくれた。[34]

こうしてみると、サリンジャーの退院は八月に入ってからということになる。

ではここでサリンジャーが陸軍病院に収容されたという伝記的事実と、彼自身が虚構化した物語を比較してみたならば、どのようなことにわれわれは気づくであろうか。

「エズメに捧ぐ」の語るところによると、X二等軍曹は終戦（armistice）になる前からバイエルン州のガウフルトという町（村）（Gaufurt, Bavaria）の民家に他の九人のアメリカ兵士とともに宿営していて、その後彼は入院し、ヨーロッパ戦勝記念日（V-E Day）、つまり一九四五年五月八日から数週間（several weeks）後に退院して帰ってきた。入院期間は二週間であった。[35] 言い換えれば、X軍曹は五月の末か六月の初めに退院したことになる。これはサリンジャー二等軍曹の入院を七月初旬としたアレグザンダーの伝記の記述、あるいは七月二十七日に入院先からヘミングウェイに手紙を書いたという事実とも食い違う。さらにサリンジャーはドイツ南東部のバイエルン州ニュールンベルクなる陸軍病院に入院したはずなのに、X軍曹はドイツ中部のヘッセン州フランクフルト・アム・

マインの病院で治療を受けたことになっている。ニュールンベルクとフランクフルト・アム・マインとの間は直線距離で二百キロ以上ある。相当な距離だ。

そもそも作者サリンジャーが言及しているガウフルトとは、どの辺に位置するものなのだろうか。それが分からない。地図を調べても出てこないのである。もしかしたら架空の地名なのかもしれない。[36] クレー伍長がX軍曹をジープでフランクフルト・アム・マインなる病院からガウフルトの民家まで連れ帰ったというから、両者の距離はさほどのものではないのだろう。それにしてもサリンジャーはなぜガウフルトなどという架空の地名（この町ないしは村が実在しないとしての話だが）を物語の中に持ち込んだのだろうか。またなぜX軍曹の入院先をニュールンベルクからフランクフルト・アム・マインに移したのだろうか。やはりほとんど無意識のうちに自分の伝記的事実を少しでも曖昧なものにしようとする衝動がここではたらいていたと、考えざるを得ない。あたかもいずれ有名作家になれば、過去の経歴が洗いざらい調べ尽くされる運命にあるのだということに思いが至らぬかのごとく。

さて、サリンジャーはめでたく退院したその翌月、つまり九月にある女性と結婚した。これは彼の周囲に驚愕の念を起こさせたようである。女性の名前はシルヴィア（Sylvia）といった。

いったいシルヴィアとは何者なのだろうか。

ごく早い時期の一九六一年九月、『タイム』誌にサリンジャーの伝記的スケッチを書いたジョン・スコウは、「ソニー――序章」の中でつぎのように述べた。ソニーとは、サリンジャーの少年時代の愛称である。

サリンジャーは一九四六年にニューヨークに帰り、軍務のみならず、あるヨーロッパ人女医との短い、不首尾

な結婚からも解放された。この二人は明らかに折り合うことなどできない存在であったが、のちのサリンジャーが主張するところによると、二人はテレパシー的な繋がりを持ち、同じ事柄が［二人に］同時に起こることに気づいていたという。[37]

また同年の十一月、アーネスト・ハヴマンが『ライフ』誌に「ミステリアス・サリンジャーの探索」を載せ、戦時中のある時期、サリンジャーは医者であるフランス人女性――おそらく精神科医――と結婚したと述べた。[38] そして一九六三年にサリンジャーの評伝を出版したウォレン・フレンチ教授は、このハヴマンの説を紹介したあと、

サリンジャーはこの結婚を一度も認めたことがなかったし、またアーネスト・ハヴマンの主張とは違って、一九四七年、フロリダ州でサリンジャーの離婚が認められたということは、同州の人口動態統計局の記録にはない。[39]

と主張した。ところがその後ハミルトンの調査したところによると、つぎのようになる。サリンジャーの手紙から推測されるように、結婚の相手はフランス人女性、名前はシルヴィア、そして結婚の時期は一九四五年九月。翌年の五月、サリンジャーはシルヴィアを伴ってアメリカへ帰国。しかしまもなくシルヴィアはアメリカでの生活を嫌ってヨーロッパに帰り、離婚。一方、サリンジャーはフロリダのデイトナ・ビーチにあるホテル・シェラトン・プラザで自分たちの結婚が終わったことを発表した。このホテルは短篇「バナナフィッシュにうってつけの日」とよく似た舞台である、云々。[40]

アレグザンダーも、シルヴィアをフランス人女性、医者おそらく心理学者だろうと言う。彼によると、サリンジ

ャーは九月にシルヴィアと出会い、それからほんの数週間後に結婚。そして四六年五月、新妻を伴ってニューヨークに帰還したが、シルヴィアは突然フランスに帰国。帰国と同時に離婚の申請をし、それが認められ、かくしてわずか八ケ月ばかりの結婚生活にピリオドが打たれた。以上がこれまでわれわれに伝えられてきたシルヴィア像であった。

だがサリンジャーの長女マーガレットの描くシルヴィア像はこれとまったく異なる。「まったく」というのは、彼女はフランス人ではなく、ドイツ人だったという意味だ。マーガレットによれば、シルヴィアはドイツ人女性で、「エズメに捧ぐ」に描かれているのと同じく、サリンジャー自身が逮捕したナチスの下級党員だったという。これはまことに衝撃的な証言である。本当にそうなのだろうか。

マーガレットの証言はつづく。サリンジャーの二度目の妻クレアによれば、シルヴィアは異常な女であったという。サリンジャーとシルヴィアは帰国後、ニューヨークの両親と同居した。しかしサリンジャーの姉ドーリスがマーガレットに語ったところによれば、サリンジャーの母はシルヴィアを嫌っていた。シルヴィアは長身で痩せた女、黒髪と青白い肌、血のように赤い唇と爪をしていた。切り裂くような辛辣な口のききかたをし、医者らしいところがあった。また「いかにもドイツ人らしかった」（“She was *very* German”）

さらにサリンジャー自身が再婚した妻クレアに語ったところによれば、シルヴィアは若くして何かを成し遂げ、しっかりした考えの持ち主だったが、「黒髪の、恐るべき激情の女、彼を魔力で魅惑した悪なる女」、サリンジャーがナチスを憎んでいたようにユダヤ人を憎んでいた女、そしてそのことを彼に感じさせずにはおかない女ということになる。また二人の関係は肉体的にも感情的にも極度に緊張したものだったというのが、クレアに語ったサリンジャーの言葉であった[41]。

だがシルヴィアは本当に「エズメに捧ぐ」に登場するような女性ナチ党員だったのだろうか。マーガレット・A・サリンジャーはどこからその証拠を得たのだろうか。そしてもしそうだとするならば、この伝記的事実が「バナナフィッシュにうってつけの日」や「エズメに捧ぐ」の読みにどのような影響を与えるのだろうか。

サリンジャー自身は娘にシルヴィアのことを具体的に語ることがなかったらしく、したがってマーガレットは自説の根拠となるものを提示しているわけではない。だが同時に、サリンジャーは従来シルヴィアがドイツ人ではなくフランス人であると、周囲に嘘をついていたのではないか、という疑念が私の脳裡をかすめる。シルヴィアがドイツ人だったというサリンジャーの姉の証言は無視できないからだ。

サリンジャー軍曹が自ら逮捕したナチ党員の女性の妖しい魅力に屈して、恋に落ちるというのもあり得ないことではない。それにシルビアが従来言われてきたようにフランス女性であったとするならば、サリンジャー軍曹が終戦前後のどさくさの最中（さなか）、フランス女にドイツで巡り合ったというのも、少々不自然な話だ。私自身以前からそう感じていただけに、シルヴィアのドイツ人説が妙に説得力を帯びてくる。

一九五一年、サリンジャーは、今なお自分と自分のフランス人の妻の間を結ぶひとつの〈絆〉があると、リーラ・ハドリーに語った。「[五一年当時] 彼ら二人はたとえ何マイルも離れていてもトランス状態に入って出会いを果たし、会話を交わすことができたのです。つまり二人が同じ夢を見るってわけ。テレパシー風な言い方をすれば、ふたりの結婚はまだつづいていたのよ」[42]

これは、ハミルトンがハドリー女史から聞かされたという話の紹介である。テレパシーにまつわる話題は、既述

したようにジョン・スコウの『タイム』誌の記事にも見られたことだった。もう一度繰り返すが、サリンジャーは離婚した妻のことをハドリー女史に語るに際して、妻が実際にはドイツ人女性であったにもかかわらず、あたかもフランス人女性であるかのように偽っていたのかもしれない。またアレグザンダーによると、サリンジャーは、シルヴィアとの結婚は一つにはテレパシー的繋がりがあったからであり、実際ふたりは非常に波長が合い、何か特定のことが起こりかけたときには、ふたりが同時にそれを感知することもあったと周囲に語っていたという。[43] さらにこれまたアレグザンダーの伝えるところによると、一九五二年の秋サリンジャーはハドリー女史に向かって、自分は夢の中でたびたびシルヴィアに会うと言い、その出会いの体験について何もかも語って聞かせたという。[44] そしてもしこれが事実だとすれば、われわれが［既述した］長女マーガレットの口を通して聞かされるサリンジャーとクレアの会話に見られるサリンジャー自身の証言も、少なくとも部分的にはウソであったことになりはしまいか。

サリンジャーとシルヴィアの離婚はサリンジャーが望んだことではなく、いわば彼の方が妻に逃げられたのだ。そして彼は二度目の結婚相手である若きクレアに出会うまで、シルヴィアに愛着を抱きつづけていたのだと推測される。

ここまで書いてきて、私はふと思う。サリンジャーとシルヴィアの出会いにおけるテレパシー的繋がり――これこそまさに「エズメに捧ぐ」においてX軍曹が女性のナチ党員の書き込みと出合った啓示的瞬間として虚構化されているのではないかと。退院後もなお戦争神経症に苦しみつづけるX軍曹が、「ああ神よ、人生は地獄です」とドイツ語で書き込まれた女性ナチ党員の言葉に奇妙な精神的波長の一致を感じとったとすれば、これまたサリンジャー軍曹自身の心情の一端を物語るものだったといえないこともないのだ。

しかしこれは作品論になる恐れがあるので、ひとまずこれくらいにしておくとして、とにかく［長女マーガレッ

トの証言が正しいとしての話だが」サリンジャーはドイツにおいて元ナチ党員の女性シルヴィアと結婚し、祖国のアメリカで離別することとなったわけであるが、ユダヤ系アメリカ青年が元ナチ党員と結婚したことの精神的負い目、そしてその女をフランス人であるかのように偽りつづけねばならない心の重荷、さらにはこの愛する〈異常な女〉との離別の悲しさ、苦しさ、そしてなお夢の中で二人が会いつづけることの一種のテレパシー現象――これらの諸々の要因が重なりあって、彼をして東洋的神秘思想へと駆り立てたのではないか。愛着が欲望を生み、欲望が苦しみを生み、それ故こうすれば苦しみを避けることができ・・・・云々とは、サリンジャーがハードリー女史に語った言葉だという。これまたアレグザンダーがわれわれに伝えてくれていることだ。[45] 要するにサリンジャーは、「エズメに捧ぐ―愛と汚辱のうち」の言葉を借りるならば、己れの人間性に潜む〈汚辱〉(squalor)を深く意識していたということでもあるだろう。そしてこの短篇を発表した一九五〇年あたりのサリンジャーが〈僧〉(monk)になることを真剣に考えていたとすれば、[46] シルヴィアと離別したあたりからの彼のの心境は「穢を捨て浄を忻ひ、行に迷ひ信に惑ひ、心昏く識り寡く、悪重く障り多きもの」[47]のそれからさほど遠くはなかったはずである。それ故また彼が作品の中で一度自分自身を殺してみようと試みたとしても、なるほどと納得がゆくのだ。むろん私は短篇「バナナフィッシュにうってつけの日」("A Perfect Day for Bananafish," 1948) におけるシーモア・グラースの自殺のことを言っているのである。

その三

若きノーマン・メイラーが偉大なる戦争作家をめざし、自ら志願してヨーロッパ戦域ではなく、太平洋戦争に参

加したという話はあまりにも有名である。だが戦争小説を書き上げるには、戦場で犬死にしてしまっては元も子もない。そこで彼は自らの戦死を回避するために、炊事係といった直接戦闘にかかわりのない任務につくようにしていた。考えてみれば、これははなはだ卑怯な行為ではないか。戦争を戦うのではなく、従軍記者よろしく戦争を観察する行為に通じるのではあるまいか。これとは対照的に、サリンジャーは海外の戦地に派遣されても、戦争小説を書こうという気持ちはまったくなかった。彼は一人のアメリカ青年としての義務感から戦争に参加しただけなのだ。できることなら国内に残ってせっせと創作に専念したいと思っていた。とにかく職業作家になりたい、この一心だけであった。それ故に戦場にあっても、暇を盗んでは短篇を書いて故国に送りつけていたのだ。それにしてもすでに見てきたように、彼は、一九四四年六月の初めのノルマンディー上陸作戦から四五年五月のドイツ国防軍の降伏にいたるまでの一年近く、史上最大の作戦計画に則った激戦の数々を生き延び、文字通り弾丸の雨をくぐりつづけたわけで、作家志望という人生の目標を胸に抱いていただけに戦争はことのほか過酷で辛く思われたことであろう。

それに彼には戦争については書くまいというひそかなる信条もあった。つまり実際の戦争体験をする以前の戦争観ともいうべきものだ。それは短篇「最後の休暇の最後の日」の主人公ベーブ・グラッドウォーラー軍曹の口を通して明確に語られる。

ベーブ軍曹は言う。

第一次世界大戦に参加した世代の人たちは、戦争は地獄だと言ってその残酷さについて語るが、しかし同時に自分たちが一人前の男に成長できたのも、その残酷さのおかげだという口ぶりである。したがってそれは、結果的には一種の自慢話に聞こえてしまう。おそらく第一次世界大戦後のドイツでも、同じような雰囲気があったに違いな

い。そこでヒトラーという男が、自分たちのような若い世代の者たちも、大人の世代の者たち以上に勇気があるんだということを証明したくなったのではないか。

もちろん今度の戦争、つまり第二次世界大戦はアメリカにとっては聖なる戦いであり、ナチズムやファシズム、そして日本の軍国主義は打ち破らねばならない。だが戦場で戦った男たちは、戦争が終わって帰還したならば、誇らしげに戦争体験について語ることは慎むべきである。戦場におけるヒロイズムだの、ゴキブリだの、タコツボだの、あるいは流血だのと騒ぎ立て、それらについて書いたり、絵にしたり、映画にしたりするのは止めるべきである。そうでないと、次の世代の人びとも第二、第三のヒトラーの被害を被ることになるだろう。むしろわたしたちは、戦争を含むいっさいの暴力を軽蔑する態度を取るべきである。戦争を軽蔑し、嘲笑することを子どもたちに教えなければならない。これが戦争に参加した者の道徳的義務である。

以上のようなベーブの主張は、ヨーロッパの戦地に赴く前のサリンジャー自身の信条でもあった。戦争の残酷さと悲惨さについて語りながら、同時にその体験談が結局は自慢話に変わってゆくことの危険。サリンジャーが同世代のアーウィン・ショー、ハーマン・ウォーク、そしてノーマン・メイラーのように本格的な戦争小説を書かなかったのは、ひとつにはそのような信条によるものである。そしてそれだけに、多少逆説めくが、サリンジャーの作品に見られる戦争の影はいっそう貴重なものに思えてくる。

サリンジャーが短篇「最後の休暇の最後の日」を発表したのは、一九四四年の七月。メイラーの『裸者と死者』とショーの『若き獅子たち』が出たのは一九四八年で、「最後の休暇の最後の日」の三年後である。したがってベーブ軍曹の口を借りて語られるサリンジャーの戦争観が、メイラーやショー等に対する反発によるものでないということは明らかである。そうではなく、そこには第一次世界大戦のヒーローたるヘミングウェイに対するアンチテー

ゼが隠されていたように考えられる。そしてそれはまた同時に、たとえばこれまたユダヤ系作家たるソール・ベローの『宙ぶらりんの男』(*Dangling Man*, 1944) が物語の冒頭からヘミングウェイのハードボイルド性へのアンチテーゼを打ち出し、逆にソフトボイルド性を標榜したということと軌を一にするものなのである。

もちろんわれわれがすでに見てきたように、ほどなくサリンジャーはパリでヘミングウェイに「最後の休暇の最後の日」を見せて褒められることになるとか、その他諸々の出来事が重なり、両者の関係――主としてサリンジャーの側からの――は一筋縄ではいかない複雑さを伴っているのだが、今ここでこれについて吟味している余裕はない。

さて、以上のような信条を抱いてヨーロッパの戦地に赴いたサリンジャーではあったが、いわば地獄ともいうべき数多くの激戦地を渡り歩いたあと、やはり自分の戦争体験について完全に沈黙を守るというわけにはいかなかったらしく、いくつかの短篇を発表することになる。いわゆるミニマリズム小説の典型ともいうべき「フランスにおける若い兵士」("A Boy in France," 1945) がその一つだ。これは、戦闘が小休止し、綿のように疲れ果てた若いアメリカ兵士が夜中に身を隠して眠るためのタコツボを掘る力もなく、そうかといって雨に濡れた地面で夜を過ごすわけにもいかず、そこで戦死したドイツ兵が使用したらしい穴に入り、可愛い妹からの手紙を読み返しながら眠りにつくという物語である。直接的な戦闘場面は出てこないものの、戦場の惨めな状況は読者の胸を打つ。指の爪がはがれて痛み、皮膚に噛みつく蟻をつぶすこともままならない惨めさと、妹の懐かしい手紙や、夢の中に現れる故郷ののどかな情景とのコントラストが見事に描かれる短篇である。

戦争が終わって何年も経ってから、妻のクレアがサリンジャーに一家そろってのキャンプ旅行に加わるよう求めたところ、彼は激怒し、戦争の大半をタコツボの中で過ごしたのに、あと一夜たりとも野宿は真っ平だと言って撥

ねつけたという。これも長女マーガレットの証言である。[48]

もう一つの短篇「見知らぬ人」では、戦争から生還したベーブが、戦友ヴィンセント・コールフィールドのかつての恋人ヘレンをニューヨークのアパートに訪ねる。戦友の戦死の様子を伝え、また親友が恋人のために書いた詩を手渡すためであった。ヴィンセントは激戦地ヒュルトゲンの森で迫撃砲弾の破片に当たって命を落としたのだが、しかしいまや他の男と結婚してポーク夫人となっているヘレンにとっては、ベーブも一人の余所者(stranger)にすぎなかった。ベーブ自身は、戦死した兵士たちのあらゆる恋人に謝りたいという気持ちであったが、しかし他方では戦場における死という恐ろしい状況を戦後の一般市民に語りたいと思う自分にもなにがしかの疑問を感じていた。戦場の超現実的な状況と平和な市民の街の風景との落差はどうしようもないのだ。かくしてベーブはニューヨークの街の中で一人の異邦人たらざるを得ないのだ。「見知らぬ人」は帰還兵士の喪失感を見事に捉えた秀篇である。

さらにハミルトンによれば、「魔法のタコツボ」(“The Magic Foxhole”)という、兵士の戦争神経症を扱った未発表の短篇もあるという。内容は、戦闘中の兵士が異様な未来派の軍服をまとった幽霊兵士と何度も出会い、尋問して分かったことだが、それは自分の息子で、かつ第三次世界大戦の戦闘員であるらしい。彼はこの息子を殺さねばならないと思う。この息子が死ねば、第三次世界大戦が起こらないかもしれない。かくして主人公が幻覚に襲われたまま陸軍病院に収容され、物語は終わるのだという。[49] これはまさにヴェトナム戦争の世界である。もしかしたらサリンジャー自身そういう幻覚、ないしは悪夢に襲われたことがあるのかもしれない。裏を返せば、彼にとってそれほど戦争が苦しいものだったということだろう。

ところでこれまたハミルトンに依拠せざるを得ないのであるが、サリンジャーは一九四五年十月『エスクワイアー』誌に一文を寄せ、こう書いているという。

今度の戦争で戦った人たちには、当惑や悔恨の情なしに奏でられる、いわば震えわななくようなメロディーを捧げるべきである。わたしはそうした本が出るのを待ち望んでいる。[50]

震えわななくようなメロディーを当惑や悔恨の情なしに奏でるとは、すべてが過ぎ去ったこととして、ある種の達観の境地に立ちながら、なお読者の胸底の琴線に触れるような作品を書き上げるということであろう。別言すれば、自分はこれからいたずらに個人的な当惑や悔恨の情にとらわれることなしに、たとえば「バナナフィッシュにうってつけの日」や「エズメに捧ぐ―愛と汚辱とともに」のような、読者の心を震わす霊妙な短篇を書いて見せるという自らの決意のほどを披露しているのだ。

そしてサリンジャーのこの決意は何年か後に見事な成果を見せることになる。彼はこれら二つの短篇において、ヨーロッパ戦線で戦争神経症に陥り、陸軍病院で治療を受けて帰還したものの、自国の戦後社会に適応できずにピストル自殺する青年と、これまた戦争神経症に苦しみながらも、その体験を客観化することによって自己救済をめざすもう一人の青年を、それぞれ自らの分身として描き切ることに成功するのだ。

本稿にあっては、これからこれら二つの短篇を詳細に論じていかねばならないのだが、「バナナフィッシュにうってつけの日」に関しては、すでに〈J・D・サリンジャーとT・S・エリオット―短篇「バナナフィッシュにうってつけの日」をめぐって〉という題で執筆ずみであるので、[51] 以下に「エズメに捧ぐ―愛と汚辱のうちに」の作品論を展開してみたいと思う。

「エズメに捧ぐ」の主人公X（二等）軍曹はニューヨークに生まれ育ち、大学を出てまもなく結婚。作家稼業をめざしていたが、大学卒業一年目にして軍隊に入る。一九四一年のことで、すでに第二次世界大戦がいっそうの激しさを増していた。合衆国陸軍の軍隊生活を送って三年目の一九四四年四月、彼は六十名ほどのアメリカ陸軍防諜部隊の一員として、イギリスのデヴォン州においてイギリス諜報部の特殊訓練を受けていた。来たるべきノルマンディー侵攻作戦を目前にしての特殊訓練である。三週間つづいた訓練は四月三十日（土曜）の午後早く終了し、その日の夜七時には、彼の部隊はそっくりロンドン行きの汽車に乗せられ、D・デーに備えて集結中の歩兵師団や空挺師団に配属される予定になっていた。少なくともそういう噂が流れていた。まことに慌ただしい一日ということになる。僚友たちは誰もかれも故国に手紙を書くのに忙しい。しかしこの日のX軍曹はまだ誰とも口をきいていないし、家族あるいは親戚に手紙を書くこともしなかった。兵舎の外は横殴りの侘しい雨。

X軍曹は迫り来る戦闘の恐怖と軍隊内の孤独を紛らすためであろう、独り兵舎から外に出て、雷雨の中を歩いて町に向かった。そして町の中心部にある教会に入り、大半が少女たちからなる聖歌隊の練習風景を見た。彼がここで耳にした聖歌はこの世のものとは思えないほどに美しく響いた。もし信仰深き人がこれを聞いたならば、一種の〈空中浮揚〉（levitation）を体験する思いに誘われるだろう、とX軍曹は言う。

やがて聖歌隊の練習が終わり、X軍曹は教会を出て町の喫茶店に入った。雨はいっそう激しくなっていた。するとまもなくそこへ先刻教会で聖歌隊の一員として賛美歌を歌い、美声といくぶん倦怠感をにじませた瞳の故にかくべつ彼の注意を惹いた美しい少女が入ってきた。家庭教師らしい女性と五歳ほどの弟を連れていた。少女の名前はエズメといい、イギリス貴族のお嬢さんだという。なぜ貴族のお嬢さんがこんな田舎町に？　ここで読者の想像力がくすぐられる。

ナチス・ドイツ空軍によるイギリス大空襲は一九四〇年八月頃から開始され、九月には都市への夜間爆撃に切り替えられた。ロンドンはこの九月から翌年の五月にかけて十九回も空襲を受け、一万九千トンもの爆弾を投下された。かくしてロンドン市民の疎開が始まり、一九四四年七月までに五十万人以上の市民が首都を後にした。おそらくエズメたちもこうして疎開し、叔母のいるデヴォン州の田舎町に身を寄せることになったのであろう。そして四四年の四月三十日の午後、アメリカ人兵士X軍曹とエズメの束の間の出会いとなったというわけである。

エズメは十三歳の少女にしては驚くほどに大人っぽい物の言い方をする。彼女は、自分はいわゆる社交好きのタイプではないが、あなたが非常に寂しそうで、また感じやすいお人柄のようなので、近づいてきましたと言う。そしてさらにアメリカ人は紅茶が嫌いだとばかり思っていたけれど、と切り出して相手を面食らわせ、将来はジャズ歌手になって大金を稼ぎ、オハイオ州に農場を持ちたいとか、あなたはアメリカ人にしては知的に見えるとか、立て続けに言ってのけるあたり、ホールデン・コールフィールドならば、フォニーな少女として忌み嫌ったかもしれないところだ。十三歳にして貴族の矜持、冷たい知性、豊富な語彙、すれた人生観、それにフランス語の話し方まで身につけてしまった早熟な少女。

というわけで、これを論じる学者の中には、‘extremely’という副詞を十回以上も連発し、難しい単語を駆使するくせに、‘memento’の代わりに‘momento’、‘intrinsically’と言うべきところを、‘intransically’などと間違った言葉遣いをするといって非難する人もいる。

しかしエズメに対してこのようなネガティヴなイメージを抱くことは、正当なテキストの読み方ではあるまい。‘momento’と言ったところで、必ずしも間違った単語の使い方とはいえないし、また‘intransically’にしても、彼女自身が間違ったスペリングを書きつけたわけでなく(そのようなスペリングにしたのは作者の方なのだ)、少々気取

った発音をして見せた（そして作者がその気取った発音に似せて表記した）というだけのことなのだ。

エズメは外見的にはいかにも理知的で、高慢な感じの少女ではある。しかし読者によって忌み嫌われるべき存在ではない。内面的には孤児としての寂しさを秘め、それに必死になって耐えているのだ。彼女は疎開を前にして、父から巨大な文字盤の腕時計を手渡され、父が北アフリカで戦死した今、それは思い出深い形見の品となってしまった。彼女の父の戦死は、もしかしたら一九四一年三月以降北アフリカのリビア砂漠で始まった、希代の戦車戦略家ロンメル将軍との幾多の苦しい戦闘において起こったことなのかもしれない。いや、きっとそうに違いないと、読者は想像力をはたらかせる。すると、「父は北アフリカで殺害された」（“He was s-l-a-i-n in North Africa.”）[52] とつぶやくエズメの言葉に込められた無念の思いがいっそうよく伝わってくる。そのうえ母もやがて亡くなり、弟とともに孤児の身の上となってしまった。目下叔母の許で金銭上の不自由はないにしても、孤児としての寂しさは依然としてつきまとっている。

じっさい彼女は見かけの生意気さとは裏腹にかなり神経質で、自分の指をかむ習癖は尋常のものではない。X軍曹と別れの握手のときには、彼女の「神経質な手」はじっとりと汗をかいていたという。そもそも彼女が喫茶店でX軍曹に接近してきたというのも、相手の姿に孤独の影と過敏な神経を見てとったからだということは、すでに述べた通りであるが、同時にそれは戦場で父親を失った少女が、これからノルマンディー上陸作戦に参加する若い兵士に深い同情をおぼえたからでもあるに違いない。彼女は、丘の上の秘密情報員養成学校における特殊訓練のことも、ロンドンへの部隊の移動のことも、すべて推測ずみなのだ。それにこれもテキストには書かれていないことなのだが、この四四年の時点ではロンメル将軍は北アフリカからフランス戦線に転戦していたということも、読者は想い起こしておく必要がある。X軍曹も、自分が無事に帰還できるという保証はなにもないということをよく認識

していた。まさに「類は友を呼ぶ」の諺通り、ふたりの心情には共通したものがあった。X軍曹は、「それはぼくにとって奇妙なほどに感動的な一瞬であった」[53]と感想をもらす。

エズメの弟チャールズが得意になってX軍曹に問いかける謎々――「一方の壁は隣の壁に何と言ったか？」の答えは、「角（corner）で会いましょう」であるとされるが[54]、壁というものが、追い詰められて出口を失った存在の象徴であるとすれば、これから死に向かって進んで行くであろうX軍曹も、死によって両親を奪われたエズメも、まさに壁のような存在であり、このふたりは今戦争を媒介として互いに顔を向き合わせているのだ。そして相手が駆け出しの作家であることを知ったエズメは、自分のために「汚辱」（squalor）についての物語を書いてくださいとせがむ。しかもさらに念を押すかのように、「とっても汚辱的で感動的な」（extremely squalid and moving）物語にしてくださいと言う。いったい彼女の言う〈汚辱〉とは何のことだろう。X軍曹は一瞬エズメの真意を計りかねる[55]。

〈汚辱〉とは要するに人間性のしみ、いつの時代においても人間性に染みついて離れない汚れのことにほかならない。戦場にあって人間性を麻痺させ、動物的な行動に走る兵士の姿、戦争疲労によってもたらされる心の歪み、苦しみ、そして悲しみ、ナチズムによって踊らされて犯す罪過の数々、そうした罪過を犯した不幸な人間を逮捕する任務の重苦しさ――こうしたさまざまなことの総称が〈汚辱〉なのである。また強いていえば、「バナナフィッシュにうってつけの日」でピストル自殺する帰還兵士の言動もまた〈汚辱〉に満ちたものであった、といわねばならない。

ところでこれまで述べてきたように、「エズメに捧ぐ」における主人公はX軍曹である。しかし物語の前半にあっては、主人公はそのように明示されているわけではない。冒頭に登場する人物は〈私〉という主人公兼語り手である。つまり第一人称による語りの形式をとっているのである。ところが〈私〉が物語の後半の始まりで突如第三人

称のX（二等）軍曹に変身する。このような語りの形式の変化はいささか不自然ではあるが、たとえば同じ作者の手になる「倒錯の森」（"The Inverted Forest," 1947）の場合と違って、かえって芸術的効果を高めているような気がする。その理由の一つは、X軍曹の体験する苦痛は第一人称で語るにはあまりに辛すぎたであろうと読者に想像されること。いま一つの理由は、物語の前半における〈私〉は、自分の過酷な体験を客観化しながら、それをある一人の兵士の物語として虚構化したのだという印象を読者に与えるからである。

物語の前半の冒頭における元軍曹たる〈私〉は、すでにヨーロッパ戦線からアメリカに帰還し、一九五〇年四月、良き家庭人として作家稼業に励んでいる。一九五〇年四月現在、彼は海の彼方のイギリスで執り行なわれる、十九歳になったエズメの結婚式に出席したいと願いつつも、家庭の都合でそれが果たせない。そこで六年前におけるエズメとの出会い、そしてその後の戦争体験によってもたらされた己れの悲惨な姿を回顧し、それを彼女に約束した物語たらしめようとする。

かくして物語の後半におけるX軍曹は、作者サリンジャーと同じく五つの激戦地を駆け巡り、最終的にはバイエルン州のガウフルトという町で戦争終結を迎えたもののようであるが、エズメの願いどおりに「心身の機能が無傷のまま」というわけにはいかなかった。戦闘および特別情報員としての諜報活動による神経障害がひどく、フランクフルト・アム・マインの病院で二週間の入院生活を強いられる。

退院に際してジープで迎えに来てくれたのがZ伍長。クレーという名の二十四歳の戦友である。これまで長い間ジープの同乗者として戦場を駆け回った仲だ。病院から出てきたX軍曹はげっそりと痩せ衰え、まるで死人のようだった。その形相は凄まじいものであり、タフガイのクレー伍長もそれを見て失神しそうになったという。

病院から帰った日の夜十時半頃、X軍曹は顔面が痙攣し、手が震え、タバコに火をつけたり、タイプライターの

ローラーに便箋を差し込むのももままならない。海外の軍人向けに出版されたペーパーバックの小説を読もうとしても、活字に注意力を集中させることができない。またここ数週間というものやたらとタバコを吸うようになったが、味はほとんど感じられない。歯茎は、ちょっと押しただけで出血する。書き物机の上には二十数通もの手紙が群がり、小包の類もいくつか包装されたまま積んである。

さて、机の上に散乱する手紙や小包の山の背後には、部屋の壁に立てかけた一冊の本があった。彼はいまそれを手に取ってみた。じつはこの日、彼は病院から帰ってきて二度もこの本を開いていて、これが三度目だった。そしてその見返しを覗くと、女性の小さな、まことに実直そうな筆跡で書かれた「ああ、神よ、人生は地獄です」というドイツ語が眼に飛び込んできた。

書物はヨーゼフ・ゲッベルスの『前例のない時代』（"Die Zeit Ohne Beispiel"）。戦争終結の前からX軍曹たちが宿営していたこの民家の娘の本である。娘は三十八歳になる未婚の女性。女性はナチ党の下級幹部であったが、占領軍の軍法基準からすれば、自動的に逮捕の対象になるだけの地位にあった。そして彼女を逮捕したのは、ほかならぬX軍曹自身であった。

いうまでもなくゲッベルスはナチ政権下で啓蒙宣伝相をつとめ、ユダヤ人大量虐殺の片棒をかつぎ、ヒトラーの・あとを追って自殺したナチズムの権化ともいうべき人物であった。彼は幼い頃に罹った骨髄炎が原因で生涯にわたり彎足（わんそく）という肉体的ハンディを負いつづけ、そのため幾重にも屈折した人生観のうちに人間性そのものを徹底的に軽蔑するようになっていた。また祖国を滅ぼす資本主義と物質主義の元凶はユダヤ人にありとして、ユダヤ人の排斥に全精力を傾けた。かくして一九四一年に出版された『前例のない時代――一九三九・四〇・四一年における演説と論説』[56]は、一九三九年、四〇年、および四一年の三年間にわたる演説と論説を集めた本である。〈前例のない時

代〉の主たる意味は、第二次世界大戦前夜のドイツは第一次世界大戦前夜のそれとはまるで違うのだということで、一九三九年に書かれた論説「前例のない時代」で彼はこう書いているという。

創造的なドイツ精神は、史上初めて自らをあらゆる官僚的、君主的束縛から解放し、そのあらゆる栄光のうちに花開くことになったのだ。[57]

「エズメに捧ぐ」のナチ党員たる女性は、当時の多くのドイツ国民と同じく、ゲッベルスのような天才的な政治的デマゴーグのこのような言葉を信じながら、一路地獄へ、地獄へと突き進んで行ったのだ。だが「エズメに捧ぐ」の読者がここでとくに印象づけられることは、当の女性ナチ党員を逮捕して得意になっている主人公X軍曹の姿が微塵も浮かび上がってこないということである。それどころか、彼は次のように述懐する。

そこにはインクで、小さな救いがたいまでに几帳面な筆跡で書かれた、「ああ、神よ、人生は地獄です」というドイツ語の言葉があった。それに先立つ言葉も、後につづく言葉もない。白いページにそれだけが孤立して浮かび上がる言葉は、部屋の病的なまでの静けさの中で、抗しがたい、古典的ともいえる告発の重みをもっているように思われた。[58]

X軍曹がこのドイツ人女性の嘆きの言葉に汲み取った〈告発〉(indictment)の意味は、彼女を含むドイツ国民を虚妄のイデオロギーの魔界に誘い込んだゲッベルスに対する告発であったことに間違いないとしても、それは同時

にナチズムの操り人形となって空前の歴史的組織犯罪に荷担することになってしまった自分自身に対する告発ということであったかもしれない。あるいはまたX軍曹はこうも感じたのかもしれない。彼女の書き付けに見られる〈地獄〉とは、国のためにと思って結婚もお預けにして党の活動をつづけてきたのに、状況の急変とともに敵軍の兵士に逮捕され、やがて極悪の犯罪者として裁かれねばならない自らの運命を恨んでの心境を語るものであると。とすれば、X軍曹もまた、軍務のためとはいえ、そのような女性を逮捕することによって他者を地獄に追い込んだ張本人という苦しい立場に立つことになる。そしてこれまた一つの〈地獄〉といえるであろう。

Xは数分間そのページを凝視し、［その言葉に］いまにも吸い込まれそうになりながらも、必死になって踏みこらえた。[59]

おそらくX軍曹もまた女性とともに「人生は地獄だ」と叫びそうになったのだろう。彼の神経の摩滅が極限に達し、病院に収容される羽目になったのは、物語のコンテキストからして、明らかに女性逮捕のあとであった。そして退院の日の夜、彼は戦争神経症という自らの〈地獄〉を体験しながら『前例のない時代』の見返しにある女性の言葉を眺めているのだ。そしてまさにこの瞬間こそ、X軍曹と女性ナチ党員におけるテレパシー的な一瞬、また伝記的側面におけるサリンジャー軍曹とシルヴィアの間のテレパシー的繋がりの置き換えないしは虚構化に通じるものなのであろう、と私は思う。

X軍曹はすかさずそのドイツ語の書き込みの下にドストエフスキーの言葉を英語で書き記すことになる。絶望と地獄を愛によって包み込もうというのである。

・・・「神父諸師よ、『地獄とは何であるか？』わたしはじっと考えてみる。わたしは言いたい、それは愛することのできぬ苦しみのことである、と」

“Fathers and teachers, I ponder ‘What is hell?’ I maintain that it is the suffering of being unable to love.”[60]

と同時に彼はさらにこう語りつづける。

そしてこう書いた下に彼は、ドストエフスキーという名前を書きかけたが、ふと見ると、自分の書いた文字がほとんど判読できないことに気づき、全身を恐怖が駆け抜けた。彼はそのまま本を閉じた。[61]

長女マーガレットは言う。作者サリンジャーがニュールンベルクの病院から出たあとに国内の友人や家族に宛てて書いた手紙の筆跡も、本当にゾッとするような薄気味悪いものだったと。[62] こうしてまたしてもサリンジャー軍曹とX軍曹のイメージが読者の脳裡で二重写しになるのだが、話を先に進めよう。

サリンジャーがここで引用している『カラマーゾフの兄弟』（第六篇）におけるゾシマ長老の言葉は、西欧の多くの知識人たちが長年にわたって親しんできた古典的英訳、つまりコンスタンス・ガーネット女史のものである。

Fathers and teachers, I ponder, “What is hell?” I maintain that it is the suffering of being unable to love.[63]

これには少しばかり誤訳が混じっているようであり（ロシア語の読めない私には断言はできないのだが）、原卓也氏の日本語訳を読み返してみると、「神父諸師よ、『地獄とは何か？』とわたしは考え、『もはや二度と愛することができぬという苦しみ』であると判断する」となっている。[64] またガーネット女史以後の英訳、たとえばペンギン版の英訳を覗いてみると、

Fathers and teachers, I think: 'What is hell?' I argue thus: 'The suffering of no longer being able to love.'[65]

つまり単に「愛することができない」ではなく、「二度と愛することができない」とあらねばならないようである。『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老やアリョーシャにとって、そして作者ドストエフスキーにとっても、まず最初にイエス・キリストの根源的な〈愛〉が厳然として存在しているのであって、彼らは現代人がもはやイエス・キリストのように愛することのできないことの不幸を説いているのだ。神の子、奇跡の人イエス・キリストのように愛することは、現代人にとってもはや不可能なことだ。しかもわれわれは、キリストのように愛することができないことが地獄であるということにも気づかない。だがガーネット女史の誤訳のせいもあってか、X軍曹にも、そして作者サリンジャーにも〈イエス・キリストの愛〉という観念が欠落していたようだ。

シルヴィアとの恋に落ちた作者サリンジャーと違って、物語ではX軍曹はその女性に恋をすることにはならず、海の彼方の美少女エズメの無垢なる愛によって救われる。

X軍曹はゲッベルスの著書を閉じてからまもなく、例のクレー伍長が部屋に入りこんできて、さまざまな会話のやり取りがあり、伍長は再び出て行った。そこでX軍曹はニューヨークの旧友に手紙を書こうと思うのだが、手の

痙攣と激しい動悸のためにそれも果たせず、絶望の淵に落ち込んでいると、ふとノルマンディー上陸作戦が開始された日の翌日、つまり一年以上も前の一九四四年六月七日に出された（と思われる）エズメの小包に出くわす。何度も転送されてようやく届いたものであった。そこには軍曹の生還を祈る少女エズメの心温まる手紙と、幸運の御守りとしての腕時計が入っていた。

巨大な文字盤をもつこの時計は、長い旅のあと文字盤のガラスが壊れて役に立ちそうにもなかったが、それはもはや問題ではない。エズメにとっては、それが北アフリカの砂漠の戦場で果てた最愛の父の形見であったということを読者は忘れていない。軍曹の孤独にも気づかず、ニューヨークのデパートのサービス低下を嘆いたり、カシミアの毛糸をせがむ妻や義母の心ない手紙や、子どもたちの土産として敵軍の銃剣や鉤十字章をせがむ兄の無神経な手紙とはまるで違うのだ。軍曹は長いこと時計を手にして坐っているうちに、ふと吸い込まれるように心地よい眠りに誘われた。心穏やかに眠りに入ること、これこそ神経の病いから抜け出す最高の、そして唯一の道であることは、誰しも知るところである。しかもそれは陶酔感にも似た甘美な眠りであった。軍曹は思い出に残る、海の彼方の美しい少女エズメに向かって語りかける。

エズメよ、人間、本当に眠くなったとき、必ず心身ともに無傷の元の状態に戻るチャンスが出てくるものだよ。[66]

「エズメに捧ぐ―愛と汚辱のうちに」は、まことに感動的な愛と汚辱の物語である。戦争を背景とした物語で、これ以上に胸を打つ作品を私は知らない。エズメの爪を噛む仕種（しぐさ）を含めて、物語の細部描写の表現はじつに行き届いた技巧を見せ、完璧そのもののように思われる。

かくしてX軍曹は、ナチ党下級幹部の女性の書き付けの中に地獄の声を聞き、少女エズメの手紙の中に天上界の声を聞いたのだ、と言い方が許されるであろう。

その四

われわれの「エズメに捧ぐ—愛と汚辱のうちに」論も終りに近づいてきたが、ここでもわれわれは、「エズメに捧ぐ」を含む短篇集『ナイン・ストーリーズ』の巻頭にエピクラフとして「隻手の音声」が掲げられているという事実を無視するわけにはいかない。このエピグラフはテキストの重要な一部をなすものだからだ。

両掌相打って声あり、隻手に何の音声かある。

——禅の公案

We know the sound of two hands clapping.
But what is the sound of one hand clapping?

——A ZEN KOAN[67]

これまで何度か触れたように、妻のクレアが娘マーガレットに語ったところによれば、サリンジャーは一九五〇年（「エズメに捧ぐ」はこの年の四月に発表された）には僧になることを真剣に考えていて、すでに彼は鈴木大拙とも友人関係にあり、またアメリカとカナダの境界をなすセント・ローレンス川の小島群サウザンド・アイランズで

瞑想の修行をしていたという。だが翌年『ライ麦畑でつかまえて』が出版されたあたりには突如としてヒンズー教に切り替え、マンハッタンの東九十何丁目かにあるヴェーダーンタ・センターのスワミ・ニキラナンダ師の許でしばしば研究をしていたという。[68] ただ一方、故金関寿夫氏にはこういう文章がある――「さきに触れた佐々木指月が開いた米国第一禅協会メリー・ファーカス女史から直接聞いたのだが、サリンジャーは五五年頃一時この禅協会の会員だったという」[69] こうなると話がややこしくなるのだが、今から振り返ってみれば、サリンジャーは一九五三年一月の末にヒンズー教の聖者としての少年を描いた短篇「テディ」を発表し、同年四月にそれを『ナイン・ストーリーズ』に収めながら、それの巻頭に白隠禅師の「隻手の音声」を掲げたわけで、当時のサリンジャーにあってはヒンズー教も禅仏教も同じ東洋の神秘思想としてさしたる違いも感じられなかったのかもしれない。要するに彼は東洋思想の神秘主義的な側面に惹かれたのだ。

しかしそうはいっても、サリンジャーが『ナイン・ストーリーズ』を出版した時点でわが白隠の人と思想についてどれだけ精通していたかとなると、話は別だ。一般にこの短篇集のエピグラフ故に、その各短篇の主人公がすべて最後に禅的な悟りを得て、物語の完結となるといった読み方をするようだが、これは安易な読み方だと思う。たしかにそれぞれの物語が主人公のある種の自己啓示、開眼とともに終わるという言い方は可能であるが、しかしそれはすべての優れた小説作品に共通することであって、それを即座に禅的悟りに結びつけるのは不自然極まりない。ましてや〈隻手の音声〉に結びつけるなど。早い話が、苦悩と絶望の果てに自殺に追い込まれた、あるいは自らの意志によってこの世に別れを告げた「バナナフィッシュにうってつけの日」のシーモア・グラースが〈隻手の音声〉を聞いた悟りの人、といった解釈が正当化されるとするならば、白隠自身、眼を白黒させるに違いない。シーモアは自動拳銃の銃声を聞きながら死んでいったのだ。

現世にあって悟りを開き、仏性としての本来の自己に目覚めることが、禅でいうところの「見性成仏」であるとするならば、それは自殺と無縁のものでなければならない。そこでわたしは自問自答する。もし『ナイン・ストーリーズ』に収められた九つの短篇の中で、かりにも白隠の〈隻手の音声〉を聞いた、ないしは少なくとも聞くことができそうな境地に置かれた人物がいたとすれば、それは誰であろうか、と。それは「エズメに捧ぐ」のX軍曹ではあるまいか。何を血迷ったことをと叱られそうだが・・・・。

そもそも白隠の「隻手の音声」とは、どのように説明されるべき公案なのであろうか。このことについて白隠自身の言葉にしたがって考えてみよう。

白隠は『薮柑子』において言う。

蓋し隻手の声とは如何なる事ぞとならば、即今両手合わせて打つ時は丁々として声あり。唯隻手を挙る時は音もなく香もなし。是れ彼の孔夫子の所謂蒸天の事といはんか、将又彼の山姥が云ひけん一丁空しき谷の響は、無生音をきく便り成るとは此等の大事にや。是れ全く耳を以てきくべきにあらず、思慮分別を交へず、見聞覚知を離れて単々に行住座臥の上に於て、透間もなく参究しもて行き侍れば、理尽き詞究まる処に於て忽然として生死の業根を払翻し、無明の窟宅を劈破し、鳳、金網を離れ、鶴、篭を抛つ底の安堵を得。[70]

（大意）隻手の音とはどんなことをいうのであろうか。今両手を合わせて打つときは、打々として打ち合う音がする。これに対して片手を空中に上げたときには、無論物理的な音など聞こえはしない。天空の空間のようなものだからだ。また森閑としてまったく何の音も聞こえない、谷間によくよく耳を澄ましてみると、無生音、す

なわち音なき音、空の音が聞こえてくる。隻手の音とはそのようなものだ。まさに森羅万象の宇宙的な空（無）の世界が開けてくる瞬間である。耳をもって聞いてはならない。頭で考えたり、感覚や知識に頼ったりしてもいけない。寝ても覚めても一心に参禅して究めていけば、道理も言葉も尽き果てたところに、忽然として生死流転の根源が断ち切られ、無明の闇が打ち破られ、ついには何ものにも妨げられない自由自在な悟りの境地が開けてくるのだ。

白隠一流のなんとも過剰なまでのレトリックではある。比喩的修辞がこんこんと湧き出て尽きることを知らない。なお「蒸天」という語は辞書には見当たらない。これは、孔子への言及にもかかわらず、白隠が「下土」に対する「上天」のつもりで使ったものであろう。

さて、私はなにも、「エズメに捧ぐ」のX軍曹が物語の結びにおいて甘美な眠りに誘われたとき、右の白隠の教えに見られるような意味での「無生音」を耳にしたと主張するつもりはない。だいいち帰国後の作者サリンジャーと違って、X軍曹は参究などということはまったく念頭になかったはずだ。戦争神経症に悩まされ、この世の地獄を体験しつつあった一人の兵士にすぎない。

しかし同時に私は「エズメに捧ぐ」を読み返すたびに、同じ『薮柑子』に見られる、次のような一文が脳裡をかすめる。

貴ぶべし隻手纔に耳に入る時は、仏声、神声、菩薩声、声聞声、縁覚声、餓鬼声、修羅声、畜生声、天堂声、地獄声、世間所有の一切の音声毫釐も聞残す事なし。是を清浄の天耳通といふ。[21]

大事なことは、片手の音がわずかでも耳に入るときには、仏の声、神の声、菩薩の声、悟りの人の声、餓鬼の声、修羅の声、畜生の声、天上界の声、地獄の声、世間一般の声、これらすべての声が聞こえてくる。これを超自然的な音を聞くことのできる清浄の力という。

要するに〈隻手の音声〉を少しでも聞き得るということは、この世のいっさいの声とともに、天上界の声および地獄の声をも同時に聞くことができるということだ。

もちろんサリンジャーが「エズメに捧ぐ」を書いていたとき、白隠のこのような教えを少しでも知っていたとはとても思えない。また物語の終わりにおけるX軍曹の心境が、越後高田の英巌寺において「夜半鐘声を聞いて、忽然として打発[72]」した、同じ年頃の若き白隠のそれと似通っている、という言い方も許されないだろう。しかしX軍曹は、たとえ禅的参究とは無縁の人ではあっても、退院して民家の宿営に帰ってきた日の夜、故国の兄の（手紙を通しての）声や戦友の声といった世間的な声はいうまでもなく、女性ナチ党員の書き付けを通しての「地獄声」と、少女エズメの手紙を通しての「天堂声」をほとんど同時に聞くことができた、という言い方なら許されるであろう。しかもそのあと彼は心地よい眠りの中に入り込んでゆく。おそらくノルマンディー上陸作戦以来絶えて経験することのなかった熟睡であったに違いない。このような意味で、X軍曹は彼流の〈隻手の音声〉きくことのできた人物である、と私は敢えて言いたいのである。

またヒンズー教のウパニシャドに登場する哲学者ヤージニャヴァルキヤによれば、アートマンと合一した人間の魂の境地は熟睡と同一であるという。そして熟睡状態にある人間は、日常経験を形成している見るものと見られる

もの、聞くものと聞かれるものという二元性が消えて、そこに解脱という完全な安息の境地が開けてくるのだともいう。彼はブリシッド・アーラヌカ・ウパニシャドの第四章で言う。

［熟睡は］は、まことに、欲望を超越し、罪を滅ぼし、恐怖を離れた彼のすがたであります。

［熟睡状態においては］彼は福徳に追随されることもなく、罪過に追随されることもありません。なぜならば、彼はそのとき心のあらゆる憂苦を渡りこえているからです。[73]

サリンジャーがヴェーダーンタ哲学に接するようになった正確な時期については、マーガレット女史の証言にもかかわらず、いまひとつ判然としない。ただ彼が熟睡についての右のようなウパニシャドの教えを知ったうえでX軍曹の眠りを描いているのではないと思われる。なぜならば彼がヴェーダーンタ哲学に接する以前に、すでにヨーロッパの戦場で短篇「フランスにおける若い兵士」を書き、そこでも主人公はタコツボの中で妹の手紙を読みながら眠りに入る姿が見られるからである。おそらくサリンジャーは一年以上にわたる戦場生活にあって、ほとんど本能的に、眠り、熟睡のもつ深い意味を探り当てたものと思われる。

以上長々と書きつらねてきたが、われわれはそこからどのような結論を引き出すべきであろうか。

まず言えることは、サリンジャーが戦争そのものを克明に描きつづけたいわゆる戦争作家ではないということ。

彼はむしろ通常の戦争小説とはやや異質のものをめざしたというべきであろう。戦闘状況の描写や軍隊組織の抱える矛盾の剔抉などは、彼の創作の関心の埒外にあった。彼が注意を向けるものは戦争の表の部分ではなく、陰の部分、つまり一種の病菌のように忍び寄ってきて兵士の心理と神経を冒す戦争の影であった。そしてそれによって癒しがたく傷つき、ひそかに恐れおののく人間の心の襞を精緻な筆致で描いてゆく。短篇「エズメに捧ぐ――愛と汚辱のうちに」がその最も代表的なものであるが、この物語の背後の見えざるところには、戦争神経症に見舞われたアメリカ兵士と（おそらくはやや年上の）女性ナチ党員との恋が隠されていた。アメリカのユダヤ系兵士と反ユダヤ主義のナチ党員との秘密の結び付き。そしてそこから自ずと派生するであろう罪意識、後ろめたさなどが潜んでいたはずである。隠された十字架。

サリンジャーはこの事実をまことに手の込んだ、絶妙の語りの技巧によって完璧なまでにカムフラージュした。イギリスの貴族の娘エズメを登場させることによってそれを成し遂げたのだ。いやわずか十三歳の美少女の登場という奇抜な着想によって成し遂げたのだ。だがそれにしても、いったいどこからその着想を得たのだろうか。サリンジャーがイギリスの田舎町で出合ったメソディスト派教会の聖歌隊には、もしかしたら実際にエズメのような、故野崎孝氏の訳語を借りれば、「倦怠の色のにじんだ」(blasé)[74]目をした少女がいたのかもしれない。しかしそれだけではあるまい。

私の（まことに危うい）仮説によれば、それはサリンジャーの二度目の妻になることとなったクレア・ダグラスという十九歳の、洗練された知性に溢れた女子大生に求められるべきであると思う。サリンジャーがクレアと初めて視線を合わせたのは、ふたりが恋仲になる二年前の一九五〇年。サリンジャーは三十一歳。クレアは十七歳の高校生。マンハッタンのあるアパートのパーティにおいてである。彼女にはすでにボーイフレンドがいた。彼は早速

翌日には彼女の身元を問い合わせ、翌週彼女に手紙を書いたという。これはマーガレット・A・サリンジャーの証言によるものであるが、[75] 残念ながらマーガレットはそれが一九五〇年の何月何日の出来事なのかについては語ってくれない。もしこれが同年のごく初めの頃で、サリンジャーがちょうど「四月八日の『ニューヨーカー』に発表される」「エズメに捧ぐ」の構想を練っていた頃だとすれば、私の仮説は成立し得ると思うのだ。また仮に私の仮説が伝記的事実の詮索によって突き崩されたとしても、それでもなおクレアとエズメが重なり合う部分がないとはいえない。少なくともクレアはイギリスの上流階級の娘で、幼くしてドイツ空軍のロンドン大空襲を逃れて疎開の旅に出された、という点でエズメと共通するものがある。

サリンジャーがドイツで結婚したナチ党員シルヴィアは彼よりもやや年上だったようだが、「エズメに捧ぐ」に登場する女性ナチ党員は独身ながら、三十八歳とされる。これに対してX軍曹は二十五、六歳と推定されるが、故国アメリカにはすでに妻がいた。ふたりが恋に落ちるには年齢差が大きすぎるように描かれる。これは故意になされたものであろう。シルヴィアをフランス人女性として世間を欺いていた作家としては当然のことである。しかし同時に彼は、ふたりのテレパシー的愛の一瞬を、彼女の「ああ神よ、人生は地獄です」と、彼の「愛することのできぬ（愛することが許されぬ）苦しみ」としての地獄という共通項によって虚構化しようとした、という推測は可能である。

さらに、仮に私の仮説が成立しないとしても、結果的にはX軍曹がエズメによって、己れの戦争神経症と〈地獄〉をめぐる女性ナチ党員への共鳴から救われたように、サリンジャーはクレアによってシルヴィアを失った心の痛手から救われた（永久にではないが）という事実は残る。

考えてみれば、サリンジャーはシルヴィアに去られて後、フロリダのデイトナ・ビーチにあるホテル、シェラト

ン・プラザでふたりの結婚の解消を発表するあたりの頃、自殺を考えたことがあるのではないだろうか。自殺によって過去の経歴の一端を葬り去ろうとしたのではないだろうか。だが彼は自らの死の代わりに自分の分身シーモア・グラースを死に追いやった。そしてその際、彼は問題のすり替え、戦争神経症に罹って帰還した自分以外のあらゆる登場人物のすり替えを行うことによって、忌まわしい過去の経歴の一端を巧妙にカモフラージュすることに成功した。それ故多くの読者は、「バナナフィッシュ」におけるシーモアの死は理由なき自殺、動機なき自殺ではないかと戸惑った。また逆にじつにさまざまな主人公の自殺の動機を探し求めて、納得できる作品解釈を、と努力してきた。だがどれ一つとして十分に納得のゆく解釈にはならない。当然といえば、当然のはなしなのかもしれない。それほどサリンジャーのカモフラージュは完璧だったのだ。

またこうして自らの死を回避することができたサリンジャーは、その二年後、こんどは戦争神経症に見舞われて苦しむ、自らの分身としてのX軍曹の救済物語を書いた。そして長女マーガレットですら、彼女の母クレアがエズメ像のヒントになっているとは、微塵も考えていないようだが、とにかくサリンジャーはここでもまた問題と状況のすり替えを行った。つまり彼自身と元ナチ党員女性との恋物語を、自分の分身であるX軍曹と十三歳になるイギリス貴族の美少女との無垢なる精神的愛の物語にすり替えることによってカモフラージュを行っているのだといえよう。

しかしわれわれは、このことをもって作者サリンジャーの作家としての不誠実さをあげつらうことはできない。なぜならば究極的には、伝記の論理と虚構の論理は次元を異にするものだ、ということをわれわれは知っているからだ。少なくともマーガレット・A・サリンジャーの伝記の出版前に書かれた拙論〈J・D・サリンジャーとT・S・エリオット――「バナナフィッシュにうってつけの日」をめぐって〉は、そのような批評的姿勢をもって構想

されたものである。

注

1 Ian Hamilton, *In Search of J. D. Salinger* (1988; London: Minerva, 1989), p. 41.

2 Margaret A. Salinger, *Dream Catcher: A Memoir* (New York: Washington Square Press, 2000), p. 39.

3 Paul Alexander, *Salinger: A Biography* (Los Angels: Renaissance Books, 1999), p. 126.

4 渥美昭夫訳「思い出の中の少女」(『サリンジャー選集3』荒地出版社・一九七二年) 四〇~四五ページ。有り難いことに訳文には会話や手紙のドイツ語がそのまま残されている。サリンジャー研究歴の浅い私は、作者が単行本に収めることを拒否している原典を入手できないでいる。原典を所持している知人がいないわけではないが、敢えて借り受けることをしなかった。私にとってサリンジャーは、最終的には「バナナフィッシュ」と「エズメ」以外はどうでもよいのである。

5 Alexander, p. 47.

6 Hamilton, p. 40.

7 Herman Wouk, *The Caine Mutiny* (1951; Pocket Book, 1973), p. 572.

8 Hamilton, p. 62; Alexander, p. 91. サリンジャーがデヴォン州のティヴァトンの町におけるメソディスト派教会で聖歌隊の練習風景を楽しんだということは、すでに一九六一年に指摘されている。John Skow, "Sonny: An Introduction," in *Time*, September 15, 1961. Cf. Henry Anatole Grunwald, ed., *Salinger: A Critical and Personal Portrait* (New York: Harper & Row, Publishers, 1962), p. 13.

9 J. D. Salinger, 'For Esmé—with Love and Squalor" in *Nine Stories* (1953; Little, Brown and Co., paperback ed., 1981), p. 113. エズメがX軍曹に宛てて書いたという手紙は、一九四四年六月七日の日付けになっており、この時点で

彼女はアメリカ軍部隊がフランスのシェルブールに進軍することを知っていたのだろうか。

10 マーティン・ギルバート『第二次世界大戦――人類史上最大の事件』（岩崎俊夫訳・心交社・一九九四）二一〇ページ。

11 Alexander, p. 96.

12 Colonel Gerden F. Johnson, *History of the Twelfth Infantry Regiment in World War II* 出版社と出版年は分からない。

13 Margaret A. Salinger, p. 58.

14 *Ibid*., p. 60.

15 Warren French, *J. D. Dalinger* (Conn. : College & University Press, 1963), p. 25.

16 John Skow, "Sonny: An Introduction" では単にサリンジャーがフランスで従軍記者のヘミングウェイと会い、ヘミングウェイはルーガー拳銃を取り出し、鶏の頭を撃ち飛ばし、「サリンジャーは似たような出来事を〝エズメ〟の中で利用した」とだけ記されている。Cf. Grunwald, p. 13.

17 Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (1969; Bantam Books, 1970), p. 593.

18 "For Esmé — with Love and Squalor" in *Nine Stories*, p. 110.「エズメ」の中でクレー伍長はX軍曹に向かって、ふたりがドイツ軍の砲弾を避けて窪地に伏せていた折、ジープのボンネットに跳び乗った猫を狙い撃ちした思い出を得々としゃべりまくる。X軍曹はまるでその話に耐え得ないかのように、その話は止めてくれと懇願し、あの猫は毛皮のコートを着込んだドイツ人の侏儒でスパイだったんだと気違いじみたことを口走る。

19 ただしアレグザンダーの情報源はScott Donaldson, *By Force of Will: The Life and Art of Ernest Hemingway* (Viking Press, 1977) だという。Cf. Alexander, p. 99; p. 326.

20 Baker, p. 549.

21 Margaret A. Salinger, p. 59.
22 Alexander, p. 101.
23 刈田元司訳「他人行儀」（『サリンジャー選集2』荒地出版社・一九七三）一六一ページ。訳文では「シャルブール」となっているが、「シェルブール」すべきであろう。また本稿では題名の“The Stranger”を「他人行儀」ではなく「見知らぬ人」とした。
24 『第二次世界大戦』二九二ページ。
25 Hamilton, p. 88. Alexander, pp. 102–103. Margaret A. Salinger, p. 66.
26 Margaret A. Salinger, p. 55.
27 ハミルトンとアレグザンダーは「ナウハウス」（Nauhaus）としているが、マーガレット・A・サリンジャーでは「ノイハウス」（Neuhaus）となっている。後者の「ノイハウス」が正しいものだと思う。
28 Alexander, p. 107. Margaret A. Salinger, p. 67.
29 『第二次世界大戦』二六九—二七〇ページ。
30 “Esmé” in Nine *Stories*, p. 109.
31 Hamilton, p. 90.
32 Baker, p. 889.
33 Alexander, p. 109.
34 Margaret, p. 67.
35 “For Esmé” in *Nine Stories*, p. 104.
36 たとえば *Ortsbuch der Bundesrepublik Deutschland* (Frankfurt am Main·Berlin: Verlag für Standeamtswesen, 1998) を参照しても、Gaufurt という地名は出てこない。もっとも「思い出の少女」で言及されている有名なナチス強

制収容所があったブーヘンヴァルト（Buchenwald）村も出ていないから、小さな村の名前は省略されているのかもしれない。あるいは一九九八年の時点てはブーヘンヴァルトの村そのものが消滅していたのだろうか。今後なお詳しく調べてみる必要がある。

37 Grunwald, p. 14.

38 Ernest Havemann, "The Search for the Mysterious J. D. Salinger," *Life*, November 3, 1961, p. 138. Cf. French, p. 25.

39 French, pp. 39–40.

40 Hamilton, p. 98.

41 Margaret A. Salinger, p. 71.

42 Hamilton, p. 128.

43 Alexander, p. 113.

44 *Ibid*., p. 166.

45 *Ibid*., p. 167.

46 Margaret A. Salinger, p. 11.

47 親鸞『教行信証』（岩波書店・日本思想大系11・一九七三）一〇ページ。サリンジャーが浄土教的な称名念仏の問題を取り上げるのは「フラニー」（"Franny," 1955）においてであるが、これは先の話である。

48 Margaret A. Salinger, p. 44.

49 Hamilton, p. 92.

50 *Ibid*., p. 95.

51 拙論〈J・D・サリンジャーとT・S・エリオット――短篇「バナナフィッシュにうってつけの日」をめぐって〉は今

年七月末日締切りの原稿で、当然のことながら、秋になってから出たマーガレット・A・サリンジャーの伝記を参照することはできなかった。

52 "For Esmé" in *Nine Stories*, p. 97.

53 "Esmé" in *Nine Stories*, p. 102.

54 *Ibid.*, p. 98–99.

55 *Ibid.*, p. 100; p.103.

56 Die Zeit ohne Beispiel. Reden und Aufsätze aus den Jahren 1939/40/41 von Joseph Goebbels, München 1941. ゲッベルスについての権威ある伝記を書いたUlrich Höver の *Joseph Goebbels: ein nationaler Sozialist* (Bouvier Verlag・Bonn Berlin, 1992), p. 475 の書誌にはこのようなかたちで書名が挙げられている。「エズメ」の女性ナチ党員はこの書を読んでいたものと思われる。

57 Ralf Georg Reuth, *Goebbels*, trans. Krishna Winston (1993; A Harvest Book, 1994), p. 269.

58 "For Esmé" in *Nine Stories*, p. 105.

59 *Ibid.*

60 *Ibid.*

61 *Ibid.*

62 Margaret A. Salinger, p. 68.

63 Fyodor Dostoyevsky, *The Brothers Karamazov*, trans. Constance Garnett (1912; Everyman's Library, 1967), Vol. I, p. 334.

64 ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟（中）』（原卓也訳・新潮文庫・昭和五十三年）一一四ページ。

65 Fyodor Dostoyevsky, *The Brothers Karamazov*, trans. David McDuff (Penguin, 1993), p. 360.

66 "For Esmé" in *Nine Stories*, p. 114.

67 アルセン氏によれば、サリンジャーはこの公案をNyogen Senzaki and Paul Reps, *101 Zen Stories* (London and Philadelphia: Rider, 1939) から引いているのだろうという。Cf. Eberhard Alsen, *Salinger's Glass Stories as a Composite Novel* (N. Y.: Whiston Publishing Co., 1983), p. 160.

68 Margaret A. Salinger, p. 11.

69 金関寿夫『異神の国から—文学的アメリカ』（南雲堂、一九九〇）一一六ページ。

70 鎌田茂雄『白隠—夜船閑話・遠羅天釜・藪柑子』（講談社・一九九四）三一三—四ページ。

71 同書、三一四ページ。

72 同書、三一二ページ。

73 『世界の名著—バラモン教典・原始仏典』（中央公論社・一九六九）九四ページ。

74 "For Esmé" in *Nine Stories*, p. 90. 野崎孝訳『ナイン・ストーリーズ』（新潮文庫・昭和四十七年）一三四ページ。

75 Margaret A. Salinger, pp. 10–11.

追記 本稿一八九頁一三行～一九〇頁七行、一九〇頁一五行～一七行、一九一頁一〇行～一一行および注75はそれぞれ筆者の誤認につき、削除させて頂きます。（三月七日）